

中学校英語入門期の指導の在り方

- 英語学習への関心と意欲を高める学習プログラムの開発 -

英語教育の「入門期」である中学校第1学年第1学期の学習の在り方は、生徒のその後の学習意欲や理解度に大きく影響する。そこで、この時期の指導の在り方について考察し、入門期の学習プログラムを開発することを目的に研究を行った。本報告書では、教科書教材を用いた学習に入る前段階に注目し、「英語の音に慣れ、音と文字とを結びつけ、英単語を自分で読む力を育てる活動」と「コミュニケーションの意欲を高める活動」を組み合わせた21時間の学習プログラムとそれにそって行った実証授業の様子を紹介する。

目 次

はじめに	1		
第 1 章 中学校英語の現状		第 2 節 入門期の指導の在り方	
第 1 節 中学校英語に求められているもの		(1) 入門期の指導と語彙	14
(1) 英語教育をめぐる	1	(2) 入門期の言語活動	19
(2) 授業改善のための視点	3	第 3 章 学習プログラムと実証授業	
第 2 節 「英語好きですか、わかりますか。」		第 1 節 入門期の学習プログラムと実証授業	
(1) 英語学習に対する意識調査から	5	(1) 学習プログラム	20
(2) 診断テストの結果から	8	(2) 実証授業と生徒の様子	21
第 2 章 中学校英語入門期の指導の在り方		第 2 節 よりよい入門期の	
第 1 節 教科書に見る中学校入門期の英語		学習プログラムを求めて	
(1) 第 1 学年で学習する「語彙」	10	(1) 英語学習に対する意識調査より	26
(2) 第 1 学年で学習する「言語機能」	12	(2) 中間試験の結果より	27
		(3) 学習プログラムを振り返って	29
		おわりに	30
		資料 入門期の学習プログラム	
		(全 2 1 時間)	31

< 研究担当 > 直 山 木綿子 (京都市立永松記念教育センター研究課研究員)

< 研究指導 > 外 川 正 明 (京都市立永松記念教育センター研究課指導主事)

< 研究協力校 > 京 都 市 立 近 衛 中 学 校

< 研究協力員 > 西 村 久仁美 (京都市立近衛中学校教諭)

はじめに

中学校第2学年を教えていたときのこと、英語が苦手だというひとりの女子生徒が言った。「英語って読めないと書けないんだね。」英語の教師になって2年目の筆者は、恥ずかしながらその一言ではじめて「英語は、読めないと書けない」ということに気づいた。第1学年で、アルファベットを学習し、単語を読み、教科書の本文を読む活動を授業で繰り返していた。筆者の中でいつの間にか「教科書に出てくる単語や文は、読めて当たり前」となっていた。

しかし、英語は、日本語と音声面において大きな違いがあり、英語にはじめて出会う第1学年にとって、その英語を聞いたり、話したりすることに壁がある。ましてや、日本語のように1文字1音で表記されない英語を、読んだり書いたりすることはもっと大きな壁となる。はじめて学習する英語に関心と意欲を持って授業に臨む第1学年の生徒にこの壁をどう乗り越えさせるかが、その後の英語学習への関心と意欲に大きな影響を及ぼすと思われる。

そのため、生徒がはじめて英語に接する第1学年の第1学期を「入門期」と考え、入門期の指導について次のように考え、研究を進めることにした。「入門期に生徒が聞き慣れている外来語のもととなっている単語と、フォニックスの規則にそって読める単語に十分触れ、語彙を増やしなが、『感情・意思を理解し、伝える』『社交的活動をする』言語機能を中心としたコミュニケーション活動を行うことによって、英語を積極的に使おうとする態度を養うことができるであろう。」本報告では、この仮説にそって作成した学習プログラムと、それにもとづいて行った実証授業の様子を述べるとともに、入門期の指導の在り方について考察する。

第1章 中学校英語の現状

第1節 中学校英語に求められているもの

(1) 英語教育をめぐる

今、中学校の英語教育に何が求められているのかを来年度から実施される学習指導要領(平成10年版)を通して見てみる。平成10年版の学習指導要領には昭和52年版、平成元年版のそれと比較してみると次のような特徴が見られる。

外国語科を必修科目とする。

「聞くこと」・「話すこと」を重視する。

実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

学年目標・言語活動を3学年まとめて表示する。

<言語活動の取り扱い>の項を新たに設け、言語活動の配慮事項として「言語の使用場面と働き」を取り上げる。

言語材料の厳選。

次に、これらの特徴を詳しく見てみる。

外国語科を必修科目とする。

戦後以来「選択科目」であった外国語科が必修科目となった。さらに、中学校では、英語を履修することが原則となった。今まで、選択教科という位置づけであったが、実質上はかなり多くの人々が英語を学習してきたため、今までと何らかわることがないように思われるかもしれない。しかし、それが制度上必修になったということは、どの学習者にも社会が要請している英語力をつけることが求められるということである。

「聞くこと」「話すこと」を重視する。

昭和52年版の学習指導要領では、「聞くこと」と「話すこと」は、「聞いたり話したりする」のように1領域とされていた。しかし、平成元年版からは「聞くこと」が重視され、「話すこと」と分けられ、2領域とされた。今回の改訂では、さらに、教科目標に「聞くことや話すことなど」という文言があげられ、音声によるコミュニケーション能力を重視している。

また、<内容・言語材料>の<音声>についての記述では、昭和52年版・平成元年版では取り上げられていなかった「語と語の連結による音変化」や「語、句」についてもその「基本的な強勢」を明記し、音声面の基本を指導することを求めている。

実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

昭和52年版の学習指導要領では「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養う」ことが目標とされ、平成元年版では「コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」がそれにつけ加えられた。さらに平成10年版では「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことが目標に加えられた。これが、今回の改訂の大きなキーワードである。

中学校学習指導要領解説(外国語編)によると、「実践的コミュニケーション能力」とは「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識を持っているというだけでなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のこと」である。これは、言語材料につい

ての理解や練習を行う活動をないがしろにするということではない。そういう活動はコミュニケーションを図る活動を行う上で大切であり、それを行った上で、学習したことを実際に使って、自分の意見や考えを相手に伝えあう活動まで行うことを求めているのである。そうすることによって、文法規則や語彙について学習したことを生かし、場面に応じて、実際に外国語を使える能力が育成されるのである。

学年目標・言語活動を3学年まとめて表示する。

平成元年版までは、各学年ごとに目標と言語活動が表示されていた。しかし、平成10年版では、各学年目標がなくなり、4領域の目標が3年間まとめて一括して示されている。これは、中学校段階で育成すべき実践的コミュニケーション能力の基礎を3年間通して、柔軟に指導し、各学校が生徒の学習の実態に応じて各学年の目標を設定できるようにという配慮である。また、<言語活動>についても、従来は各学年ごとに示されていたが、今回は3学年を通して、4領域について書かれている。これも、生徒の学習の習熟の程度に応じて、3年間で必要な内容を繰り返して指導するなど指導者が創意工夫できるようになっている。

<言語活動の取り扱い>の項を新たに設け、言語活動の配慮事項として「言語の使用場面と働き」を取り上げている。

はじめて<言語活動の取り扱い>が設けられ、3年間を通した全体的な配慮と、各学年ごとの配慮とが記されている。これは、日常的な会話や簡単な情報の交換などができるような実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことを目的に、実際に英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする言語活動を充実するために記されている。その中で、言語の使用場面や言語の働きを意識した言語活動を求めている。このことを通して、言葉の学習というのは、文法規則や語彙の知識だけでなく、場面や働きと分離してあるものではないことを再確認している。

言語材料の厳選。

今までの学習指導要領で示された語彙数は、以下の通りである。

昭和33年版：語彙1,100~1,300語・必修基本語520語

昭和44年版：語彙950~1,100語・必修基本語610語

昭和52年版：語彙900~1,050語・必修基本語490語

平成元年版：語彙1,000語程度・必修基本語507語

平成10年版：語彙900語程度・必修基本語100語

このように年々必修とされる語彙が減っている。今回の改訂では文法事項も少し減っており、ゆと

りをもって繰り返して指導できるようになっている。また、実践的コミュニケーション能力を育成する上で欠かせないとして、季節・月・曜日・時間・天気・数・家族などの日常生活に関わる基本語は900語に含められ、日常生活でよく用いられる慣用表現の項目が新たに設けられている。

このように平成10年版学習指導領の特徴から、どの生徒にも、コミュニケーションを図る上での基本的な語彙や文法事項の知識を繰り返し身につけさせること、そして、それらを使う音声中心の言語活動を繰り返し行うことにより、3年間の中で音声によって相手の言うことなどを理解したり、自分の考えなどを伝えたりできるコミュニケーション能力の基礎を身につけさせることが強く求められていることがわかる。

一方、平成14年度から本格的に実施される「総合的な学習の時間」を利用して、小学校に英語活動を導入しても良いことになった。それに向けて、平成13年には、「小学校英語活動実践の手引」が文部科学省より発行された。

それによると「言語習得を主な目的とするのではなく、児童期の特性を生かして、この時期に英語に触れさせることが、英語を活用しようとする態度とコミュニケーション能力を育成し、国際理解を深める」ことを目的に、英語活動が小学校に導入されるということである。(1)そして、学習内容の素材を選定する視点として次の7点があげられている。(2)

音声を中心とする。

子どもの「言いたいこと」「したいこと」を扱う。

子どもの日常生活に身近なことがらを扱う。

基本的で、応用のきく表現を選ぶ。

既知のものでも新たな発見をもたらす話題等を扱う。

外国人の表現や身振りの中から、文化の違いに気づかせる。

子どもの発達段階を踏まえた話題・素材・題材を扱う。

また、その指導上の留意点として、逐一日本語に訳さない、英語の発音をカタカナに置き換えない、無理に覚えさせない、誤りは細かく訂正しない、一斉授業だけでなく、いろいろな学習形態を工夫する、をあげている。

これらのことから小学校での英語活動に求められているのは、学習すべき言語材料が先にあり、それを身につけるために言語活動を行うのではなく、まず、児童の言いたいこと、したいことが先

にあり、それを題材に活動を行うことによって、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することであることがわかる。そして、このような内容と方法による英語活動を小学校で経験したことがある生徒が中学校に入学してくることになるのである。中教審答申が小学校英語について「外国語の発音を身につける点において、メリットがある」と述べているように、彼らは中学入学時ですでに、今までの生徒に比べ、聞く力を持ち、発音において母語である日本語の影響をあまり受けず、英語特有のリズム感を持っているであろう。また、身の回りについての語彙力もあり、英語を口にすることにためらいがないと予想される。これから先、中学校ではそのような生徒を前に、授業を進めていくことになる。特に入門期においては、小学校での英語活動の魅力を上回るような授業を展開しなければ、英語嫌いを作らないために導入されたはずの小学校英語活動が、中学校で英語嫌いを作る原因になりかねない。

平成10年版学習指導要領外国語科編は、当然小学校での英語活動が「教科」の扱いではないため、それとは切り離して作成され、小学校での英語活動も「総合的な学習の時間」の中で行われるため、中学校英語と小学校での英語活動が連携されていないように見える。しかし、先述したように、小学校での英語活動の目的が「英語を活用しようとする態度とコミュニケーション能力を育成すること」であること、そして、それにもとづいて「手引」で提示されている指導内容やその指導方法が、英語活動の時間に英語によるコミュニケーションを児童に体験させることを求めていることから考えると、それは、まさに「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目的としている中学校英語につながるを得ないと思われる。これから先、小学校英語活動を意識して中学校英語を進めなければならなくなる。そして、このような小学校英語活動を意識するからこそ、なおさら、中学校英語には先述したような「実践的コミュニケーション能力」の基礎を養うことが求められることになる。

(2) 授業改善のための視点

前項で述べたように、中学校の英語教育が大きく変わろうとしている中で、当然、私たち英語科指導者も自分たちの指導の在り方を見直さねばならない。平成13年1月に文部科学省が発行した「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告」では、平成10年版の学習指導要領で求められている

実践的コミュニケーション能力の基礎をどの生徒にもつけるために、指導法の改善を求めている。

(3)それをまとめると以下の通りである。

各種の指導方法の理解と実践

多くの英語担当教員は、生徒の学習段階や学習状況に応じて、いろいろな指導法を取り入れて授業を行うべきであるが、多くの英語担当教員は、その様々な工夫のレパートリーが少なく、消極的に文法訳読方式に頼っている現状がある。そこで、英語担当教員が十分なコミュニケーション能力を身につけ、生徒や授業のねらいなどに応じて様々な指導が行えるような総合的実践力が必要である。

一方通行的な授業の在り方の改善

生徒の発想で発表したり、書いたりする活動を行い、生徒が表現力を高める機会を一層増やす工夫をすることが重要である。また、情報機器を駆使した指導の充実にも配慮が必要である。

英語による授業の推進

英語で授業を進める教員が増えたという報告もあるが、文法や訳読中心の授業を行い、ほとんど英語を使わずに指導している現状もある。教員が授業を英語で行うことは、生徒・学生に好影響を及ぼすので、一層推進すべきである。

効果的な指導事例の手引の作成と研修の推進

このような様々な工夫・改善の必要性をすべての英語担当教員が理解し、実践できるように、国は、手引き書を作成したり、研修を推進する必要がある。

この4点の改善策について筆者の考えを述べる。まず、に関して。戦前より、日本でも様々な英語教授法が輸入され、試されてきた。しかし、それらは、英語を母語とする人によるものであったり、第2外国語として英語を指導するためのものであったりし、英語が外国語である日本ではなかなか定着しなかった。最近では、第2言語習得理論として、Krashen, S. D. が提唱する Natural Approach の Input 理論が取り入れられている。この理論は、Output を自然に待つとしているが、英語授業以外で意識しない限り英語を耳にすることが少ない我が国では、Input の絶対量がたりないため、自然な Output にまで導くことは難しい。そこで、Input 理論の一部を取り入れながらも、Output を待つのではなく、Output をさせる活動を授業に組み入れ、Output へ導いていく必要が出てくる。このように、指導者はある指導法をそのまま目の前の生徒に適用するのではなく、様々な指導法に関する知識・理解を深め、それらから

生徒の実態に合うものを取り、それらを合わせて独自の指導法を作っていく必要がある。そして、そのためには、ピアノの先生がピアノを弾き、水泳のコーチが泳げるように 英語の指導者自身が、十分な英語によるコミュニケーション能力を身につけていなければならない。

については、生徒に英語によるコミュニケーション能力をつけるには、生徒に英語でコミュニケーションをさせるしかない。当然、指導者が一方的に授業を進めていたのでは、そこには、コミュニケーション活動などあり得ない。平成10年版学習指導要領で求めている実践的コミュニケーション能力とは、「実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のこと」(4)であり、「日常的な会話や簡単な情報の交換ができる」(5)力である。実際のコミュニケーションとは、基本構文があり、それを覚えるため何度もそれを口にするゲームをすることではなく、自分の思いや考え、情報を相手に伝えることであり 相手から伝えられたその人の思いや考え、情報を理解することである。よって、従来からよく行われている基本構文を口にするためのゲームや活動で終わるのではなく、その先に必ず、学習したことを使って、自己表現する場を与えなければ、実践的コミュニケーション能力はつかないといえる。

については、と関連している。生徒に限られた時間の中でできるだけ英語による Input を自然な形で与えようと思えば、指導者が英語で授業を進めることである。授業そのものを英語によるコミュニケーションの場とすることである。そのためには、やはり、指導者自身にコミュニケーション能力が求められる。そして、については、どの生徒にも実践的コミュニケーション能力の基礎をつけるためには、指導者自身が効果的な指導事例に学び、研修会等で自己研鑽を積むことが必要であろう。

あげられているこの4点以外に、筆者は学習指導要領の6点の特徴に合わせて次のような3点の改善点も必要であると考える。

授業への参加を促すための工夫をする。

文法説明、新出文法事項の導入に時間を割くのではなく、それらを実際に使うことに時間を割く。

教室で用いる英語を工夫する

については、平成10年版学習指導要領の教科目標である「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を考えれば、当然、授業へ

の参加が不可欠である。生徒が参加してみたいくなる授業とはどのようなものか。斉藤栄二は「生徒が参加する授業とは、楽しく、わかる授業である」とし、そのための原則として、次の10点をあげている。(6)

1. やさしいものをむずかしく教えるな
2. 学んだものを使わせよ
3. 英語についての説明はできるだけ避けよ
4. 生徒を動かせ
5. ゲーム化を考えよ
6. 教師がやってみせよ
7. 絵を使え
8. 和訳をできるだけ避けよ
9. 生徒の相互活動を考えよ
10. 教師はできるだけ英語を使え

これらのことは、新しいことではなく、従来からよく言われていることであり、私たちは自分たちの授業をこれらの点に関して常に振り返る必要がある。

についても、従来からよく言われていることである。今回、学習指導要領で、学年目標がなくなり、4技能の目標や言語活動も3学年まとめて一括して提示されているのは、指導者に目の前にいる生徒の実態に合わせて、各学年での目標を定め、指導計画を立て、指導を工夫することがさらに求められているということである。京都市教育委員会が示す「中学校英語指導と評価の基本的な考え方」(7)では、「英語を教える多くの指導者は、英語に関する生徒の知識の量や問題解決能力が、日本語を使用する他の教科に比べ、不充分ととらえ、生徒の自己教育力を信頼せず、教科書をすみからすみまで教え、かつ細切れの知識・理解の面的評価に終始しがち」であり、それでは英語が使えるようにならず、「英語を使用する場面を与えなければ、コミュニケーション能力は育成されないのである。また、表現能力を考えると、言語知識を総合的・創造的に活動する練習(段階)がないとそれは身に付かないのである。」と述べている。すなわち、教科書を基本としながらも、教科書を通して学習した知識を活用できる活動を行わなければならないということである。

については、インプットを与えることは大切であるが、どのような英語でインプットを与えるかも大きな問題である。相手に話しかけるときには、常に相手に話し手の意図が伝わりやすいように工夫する配慮が必要であるが、それが外国語である英語を用いるとなればなおさらである。まだ十分に目標言語を使うことができない学習者を対象と

する場合、卯城祐司は次のような工夫が必要であるとしている。(8)

1. 複文よりも単文でつなげるなど、できるだけ負担の少ない文構造を用いる。
2. 未知語が入らないようにするなど、学習者の語彙量も考慮する。
3. 時折、身振りや手振り、あるいは Yes/No など で答えさせ、学習者の反応を見る。
4. 学習者の表情を見ながら、理解に合わせてゆったりとした速度で話す。
5. 口を大きく開けてはっきりと話し、大事な情報が入っている部分などは強くゆっくり発音したり、イントネーションを変える。
6. 一度話ただけで学習者が理解したと考えず、パラフレーズするなど、落ちこぼれないような工夫をこらす。
7. 学習者が母語ですでに知っているようことがらも話の中に織り込み、背景知識を活用する。

指導者の学習者に対する話し方は、TeacherTalk と呼ばれ、母親の子供に対する話し方に近いと言われている。卯城が述べているように、学習者の言語能力に合わせて、文構造や速度、語彙量が調節される。また、学習者の反応を見ながら、何度も繰り返したり、別の言い方に置き換えたり、顔の表情、ジェスチャーが学習者の理解を助けるため、指導者は大げさなほどジェスチャーをつけたり、実物を見せたりすることが大切である。

以上、「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告」で示された指導法の改善の視点に筆者の考える改善の視点を加えて、指導者自身が自分の指導法を工夫改善する必要性を述べた。では、学習者である生徒自身が英語学習に対してどう感じているのか、また、彼らがどのような英語力を身につけているのか、次節で考察することにする。

第2節 「英語好きですか、わかりますか。」

(1) 英語学習に対する意識調査から

手島良は英語嫌いの大きな原因として「単語が読めないこと」「単語の綴りが書けないこと(覚えられないこと)」をあげている。(9)小菅敦子も「1年生半ば頃になると、音読に関する問題を現場からよく耳にする。『音声だけの授業の時は声も大きかったし、よく英語が言えたのに、教科書をまともに読めないんです。初めから文字を出して読ませておけば良かった』というものである。これは音と文字とを結びつける指導がうまくいかなかった結果から生じる」と述べている。(10)筆者も教壇に立っていたときに同じような思いをし

たことがある。入学当初、音声中心で授業を進めているときは意欲的に英語学習に取り組んでいたが、文字を導入し単語を読む活動を授業で行うようになると「英語は難しい」と言い始める生徒が増えてくると感じたことがある。

このように第1学年で文字が導入された頃が英語嫌いの第1段階と考えられるわけであるが、果たして、英語学習に対して、生徒自身がどんな思いを持っているのかを、次の3種類の資料からみてみることにする。

<表1>は国立教育研究所が行った「教科に対する児童・生徒の意識」についての調査結果である。(11)

<表1：学年別教科の好き嫌い>

教科	好きな教科(%)				嫌いな教科(%)			
	小6年	1年	2年	3年	小6年	1年	2年	3年
国語	12.5	12.2	12.1	14.1	28.8	25.4	23.8	17.2
社会	19.7	24.1	27.5	23.2	29.5	27.5	21.7	21.9
数学	16.6	18.3	16.1	14.3	42.1	33.0	39.1	46.8
理科	14.9	13.7	15.7	20.4	16.8	27.0	26.3	20.9
音楽	18.9	24.9	26.8	30.7	25.2	10.9	10.4	9.1
美術	*36.2	22.9	20.5	17.8	*10.1	13.6	14.9	13.3
保健体育	55.5	22.9	39.3	43.8	8.2	23.6	9.4	8.0
技術家庭	21.1	43.2	17.4	18.9	13.9	8.3	10.2	8.6
英語	/	17.6	18.9	10.9	/	27.4	28.2	40.6
道徳	4.3	4.9	5.2	5.1	19.6	13.7	13.4	9.7

これによると、学年が進むにつれ、「英語が嫌いだ」と答えている生徒の率は、10教科の中で数学に次いで高い。しかも、第1学年ですすでに3分の1近くの生徒が「英語は嫌いだ」と答えている。数学に比べると、第1学年時で「嫌い」と答えている率は低いが、小学校第6学年ですすでに42.1%の児童が「算数が嫌いだ」と答えていること、英語は中学校第1学年で学習が始まることを考えれば、第1学年ですすでに3分の1弱の生徒が英語が嫌いだと答えていることを重く受け止める必要がある。また、第1、2学年において「英語が嫌いだ」と答える割合に差はほとんど認められないが、第3学年になると、4割の生徒が英語嫌いである。これは、現在のカリキュラムが文法配列であり、第1学年の文法事項が理解できていなければ当然第3学年のそれも理解できないという、積み上げ教科の特性のためであろう。このことから、第1学年での指導が大切なことがわかる。それにして

も、英語は習えば習うほど嫌いになる教科なのである。

また、当研究課は第2, 3学年対象に、いつ頃、英語学習が好きだったか、あるいは嫌いだったかを調査している。(12)これは20年前に行われた調査であるが、生徒の思いを知る参考になると思われる。〈表2〉は、その結果を生徒の学習習熟度別に表したものである。

〈表2：英語学習好き・嫌いの時期〉

時 期	A (%)		B (%)		C (%)		全体 (%)			
	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い		
第1学年	1学期	前半	57.0	5.6	57.7	11.7	48.6	25.7	55.6	12.5
		後半	55.3	8.9	43.4	15.0	28.4	25.7	44.3	15.1
	2学期	前半	45.2	10.1	28.8	17.2	12.8	41.3	31.0	19.6
		後半	39.1	12.8	22.3	21.2	12.8	49.6	25.8	24.0
	3学期		37.4	16.2	20.1	29.9	11.0	53.2	23.8	30.1
第2学年	1学期	前半	36.9	17.9	15.0	30.8	14.7	53.2	21.9	31.0
		後半	34.1	20.1	9.9	36.9	7.3	56.9	17.1	35.4
	2学期	前半	29.1	23.5	12.8	44.9	5.5	57.8	16.5	40.6
		後半	26.8	24.0	13.9	44.5	4.6	63.3	16.2	41.6
	3学期		30.7	20.1	13.1	45.3	4.6	64.2	17.1	40.9
第3学年	1学期	前半	41.3	14.0	16.8	29.6	9.2	58.7	23.1	30.2
		後半	40.2	11.7	20.4	30.7	9.2	62.4	24.6	30.8

A：1学期末成績評定が5・4程度の生徒
 B：1学期末成績評定が3程度の生徒
 C：1学期末成績評定が2・1程度の生徒

この結果から、次のようなことがわかる。全体的傾向としては、第1学年第1学期前半に「英語が好きだった」と答えているものが50%以上いたが、第1学期後半から第2学期前半の、わずかな期間にそれが10%強ずつという大きな割合で減っている。一方、「英語が嫌いだった」と答えている生徒も当初の9.2%から確実な割合で増えていく。そして早くも第1学年第2学期の後半には、「好き」と「嫌い」の割合がほぼ同じとなり、第3学期には完全に逆転してしまっている。入学時、はじめて学習する教科であるため英語学習への関心・意欲が高く、どの生徒もやる気が十分だったが、第1学年第1学期中頃から、何かが障害となって、生徒の学習意欲が低下していつている。

それでも、第2学年の最初には少しそれも持ち直す傾向が見られ、年度のはじめで生徒も新しい気持ちで取り組もうとする。しかし、それも長続

きせず、その後再び「好き」と「嫌い」の差が広がっていく。そして、第2学期にはその差が一番大きくなり、4割の生徒が「英語が嫌いだ」と感じている。第3学期にはようやく「英語嫌い」が減り始め、第3学年では不十分ながら第1学年第3学期の段階までに好転する。それでも、約3分の1の生徒が「英語嫌い」のまま卒業していくのである。

これらの全体的な傾向から第1学年第1学期の指導が生徒のその後の学習に対する関心・意欲に大きく関わっていると言える。しかも、第1学期後半から英語嫌いが大きな割合で増えることを考えると、第1学期前半の指導、すなわち、生徒にはじめての英語にどう出会わせるかが課題であると言える。

さらに、学習習熟度別傾向としては、次のようなことがわかる。習熟度がC段階の生徒は、AやB段階の生徒と比べ、「好き」よりも「嫌い」と感じる生徒が多く、第1学年第1学期ですでにA、B段階の生徒との間に大きな差が生じている。C段階の生徒の関心・意欲は第1学年第2学期前半には10%近くまで落ち込み、それ以降の回復は見られない。一方、「嫌い」と感じる生徒が第1学期前半からすでにおり、第1学年第3学期には50%を越えている。C段階の生徒にとって、第1学期でいったん関心・意欲を失うとそれを回復するのはかなり難しいことが分かる。

A段階の生徒の関心・意欲は他の生徒と比べ、第1学年第1学期前半から高い。しかし、それも第2学年第2学期後半には、好きと嫌いの差がほとんどなくなるところまで落ち込む。英語学習内容を理解している生徒でさえもこのような状態である。第2学年第1学期にBとC段階の「好き」と感じる生徒の割合の差がほとんどなくなるが、これは、B段階の生徒の減少によるものである。第1学年第1学期を乗り切ったものの、第2学期に大きく関心・興味を失う生徒が増え、それが回復することはない。

この習熟度別傾向から、学習内容の理解度がその教科への関心・意欲と大きく関わっていることがわかる。英語は、日本語とは音声面や表記面でかなり違うため、はじめて英語に出会う第1学年第1学期にこの違いを乗り越え、英語を使うことが楽しいと感じさせることがその後の学習への関心と意欲とを高めるのである。そのためには、はじめて出会う英語がどんなものでも良いというわけではなく、音声面や表記面で配慮された英語を選んで生徒に出会わせることが求められる。

そうすれば、C段階の生徒の「分からないから嫌い、嫌いだから勉強しない、勉強しないから分からない」という悪循環を少しでも断ち切ることができ、B段階の生徒の関心・意欲を第2学期以降、回復させることができるであろう。そして、先の調査で見た学年が進むにつれて増える英語嫌いを減らすことができるはずである。

では、小学校英語が始まればこのような英語嫌いは改善されるのか、最後に、研究協力校で英語学習を開始する前に、第1学年対象に行った中学校英語に対する意識調査の結果をしてみる。これは中学校での英語学習を開始する前に、小学校での英語活動経験が中学校英語に対する意識にどのような影響を及ぼすかを参考程度に、また、筆者が考える「入門期の学習プログラム」が生徒の英語学習への関心と意欲とを高めるのに有効であったかどうかを調査するために行ったものである。そのため、調査数が少ないが、彼らの中学校英語に対する意識を知る参考になると思われる。

<表3：中学校英語に対する意識>

中学校英語に対する意識	%
楽しみにしている	26.7
不安もあるが、楽しみだ	42.6
不安を感じたり、嫌だなど感じたりする	30.7

<表3>から、中学校に入学してくる時点で、中学校英語に対して楽しみ、あるいは不安もあるが楽しみだと感じている生徒は、全体の69.3%であるのに対して、すでに中学校英語に対して楽しみにしている気持ちはなく、不安や嫌だと感じている生徒が、30.7%いることがわかる。

では、小学校英語活動の経験の有無が中学校英語に対する意識にどう関わっているかについて<表4>をしてみる。これによると、小学校で英語

<表4：小学校英語活動経験の有無と中学校英語に対する意識>

小学校英語活動経験の有無	中学校英語に対する意識		
	楽しみにしている	不安もあるが、楽しみだ	不安を感じたり、嫌だなど感じたりする
有(%)	19.7	48.5	31.8
無(%)	32.5	37.4	30.1

活動経験がある生徒の方が、ない生徒よりも、中学校英語を楽しみにしているが同時に不安も感じている生徒が多い。また、小学校で英語経験がない生徒の方が、不安もなく中学校英語を楽しみにしている生徒が多い。これは、小学校で英語活動を経験しているため、かえって、中学校ではどうなるのだろうと不安を抱くのだと考えられる。そして、小学校で英語活動を経験している生徒のうち3割の生徒がすでに中学校英語に対して嫌だと

感じているのも事実である。ただし、小学校での英語活動をどう感じたかと中学校英語に対する意識との関係を<表5>で見ると、小学校での

<表5：小学校での英語活動経験者の中学校英語に対する意識>

小学校での英語活動経験者の中学校英語に対する意識	楽しみにしている	不安もあるが、楽しみだ	不安を感じたり、嫌だなど感じたりする
楽しかった(%)	26.7	50.0	23.3
普通(%)	12.5	46.9	40.6
楽しくなかった(%)	25.0	50.0	25.0

英語活動経験を楽しかったと感じている生徒で、不安もあるが中学校英語が楽しみだと答えている生徒を含めると、中学校英語を楽しみにしている生徒は、約4分の3おり、小学校英語活動によいイメージを持っていることが、中学校英語に対するよいイメージにつながると言える。小学校英語活動が楽しくなかったと感じている生徒についても、同様の結果である。楽しくなかったからこそ、中学校英語に不安もあるが楽しみだと感じているのであろう。ところが、小学校英語活動に対して興味もそうなかったが、そう嫌いでもなかったと感じている生徒は、英語活動に印象が薄かった分、中学校ではどのような授業を受けるのだろうかと不安になったり、嫌だと感じたりするのであろう。

このように小学校で楽しいと感じるような英語活動が進められていくことは、中学校での英語学習で良いスタートを切ることにつながる事が分かる。

ただ、京都市立小学校での英語活動は現段階では、確定したカリキュラムにそって計画的に行われていない。英語活動を行っている学年もその内容も各学校によって様々であるため、中学校英語に対して影響が出るほどの取組がなされているとは言い難い状況である。しかし、文部科学省の動向(13)や、JASTECの調査(14)によるとこれからますます英語活動に取り組む学校が増えてくると予想される。今後、小学校における英語活動はかなり整理され、カリキュラムにそって取り込まれることが十分予想される。そうなれば、当然、中学校英語としては従来の「はじめての教科に目を輝かせて授業に臨む」生徒の姿は期待できないであろうし、今まで中学校において英語科だけに与えられていた「はじめての教科ということでの生徒の関心・興味を引く」という状況はなくなり、最悪の場合は、すでに英語嫌いの生徒を迎えなけれ

ばならないこともあり得る。そう考えると、自分たちが表現したいことを題材に「聞く」こと・「話す」ことを中心にした活動を経験してきた生徒に、入門期に、「聞く」こと・「話す」ことを中心としながらも、「読む」・「書く」活動も行いながら4技能の基礎的な能力の育成を目指す中学校英語にどのように出会わせるかが課題となってくるであろう。ますます入門期の指導の在り方が問われることになる。では、次節で中学生自身がどのような英語力を持っているのかについて見てみることにする。

(2) 診断テストの結果から

京都市立中学校教育研究会英語部会が毎年4月に第2, 3学年を対象に「診断テスト」を行っている。平成11年度に行われたテストの結果<表6・7>(15)を分析することにより、中学生の英語力について考察する。この「診断テスト」はListening Test と Writing Test からなり、それぞれの配点が、第2学年は40点と60点、第3学年は30点と70点となっている。

まず、第2学年の結果について見ていくと、英語を聞いたり、読んだりして大まかな意味を理解する力はある程度ついていることがわかる。しかし、相手に質問をしたり、対話を適切に進めるなど、自分から学習した単語や文を使って場面に応じて文を再生したり、自分の思いを表現する力が弱い。場面に応じて基本構文を使ったり、自分の言いたいことを表現したりするためには、語彙力と文法力が必要である。また、第1学年で学習する数字と序数の聞き取りの正答率が良くない。

第3学年の結果からは、まとまったものを読んで、その内容をだいたい理解することは比較的できているが、第2学年同様、語彙力と自分の思いを表現する力が弱いことがわかる。特に語彙については、日常生活でよく使う口語的表現や会話表現が定着しておらず、日常生活に必要な数字や月日、曜日等の定着も弱い。問12では、0点または無答の生徒が50%近くおり、英語で表現しようとする意欲・態度や能力が不十分である。

このように2学年通して、理解面においては一定の定着が見られるが、学習したことを使って何とか自分の思いを表現しようとする意欲に欠ける生徒も多く、表現面における能力が不十分であると言える。そこで、これらの課題を解決するために次のような指導が求められる。

文法は、実際に使える状況・場面を提示しながら導入し、口頭練習を行いその定着を図る。

<表6：平成11年度第2学年「診断テスト」結果>

問	題	ListeningTest 問題内容	正答率
1	6	・文にあう絵を選ぶ	91.8 78.5
		単語が聞き取れたか。	48.5 95.1 80.6 81.2
2	5	・対話文にあう絵を選ぶ	91.8 97.3
		以外はキーワードが聞き取れたか。	99.0 96.3 95.7
3	4	・対話を聞いた後、その内容についての質問に合う答え(記載されている)を選ぶ。	68.1 80.2 87.5
		対話文の中にキーワードはあるが、それが聞き取れたかだけでなく、対話の内容が理解できているか。	63.0
4	4	・対話を聞き、その対話の流れにあう最後の文を選ぶ。(答えも放送による)	30.3 75.9 70.3
		文法を知っているだけでなく、その知識を使ってコミュニケーションができるか。	
5	4	・質問に自分の立場で答える。(カタカナ可)	61.6 70.8
		簡単な疑問文に答え、自己表現できるか。	26.4 60.1 22.7
WritingTest 問題内容			
6	5	・対話文形式で、Aの発話に対するBの適切な応答を選ぶ。	81.8 93.3 83.9
		簡単な対話文。場面に応じた応答ができるか。	63.8 73.9
7	5	・絵に合うよう文中の抜けている部分に単語を補う。	83.4 65.6
		三単現のs, 現在進行形などいわゆる文法知識を問う。	18.6 39.3 27.0
8	6	・長い対話文中の抜けている部分に単語を選んで補う。Aが質問し、Bが答えている対話文で、Bの答えから考えて、Aの質問の疑問詞を補う。	86.5 72.4 49.9 52.1
		読みとる力とともに、語彙力を問う。	59.1 54.4
9	5	・長い対話文で、抜けている部分に単語を補う。	88.3 76.9
		読みとる力とともに、語彙力を問う。	70.5 87.1 43.2
10	4	・まとまった対話文の日本語の要約の穴埋め。	94.1 80.4
		読みとる力を問う。	89.6 79.3
11	1	・単語の並べ替え	54.6 70.8
		文法理解と語彙力を問う。	68.1
12	1	・自己紹介のための自由英作文 自己表現力を問う。	8点 34.4
			7点 11.7
			6点 12.7
			5点 4.7
	4点 11.5	3点 3.9	
		2点 3.3	
		1点 4.1	
		0点 5.7	
		無答 7.8	

<表7：平成11年度第3学年「診断テスト」結果>

問	題数	ListeningTest 問題内容	正答率
1	4	・対話に合う場面を選ぶ。	61.5
		慣用句が聞き取れたか。	86.7 91.3 65.0
2	3	・対話を聞き、その対話の流れに合う最後の文を選ぶ。(答えも放送による)	74.8
		以外はキーワードが聞き取れたか。	53.3 57.3
3	3	・対話を聞いた後、その内容についての質問に合う答え(記載されている)を選ぶ。	70.6
		対話の内容が聞き取れるか。	61.8 62.3
4	4	・二人の対話を聞き、書かれた日本語がその内容にあっているかどうか。日本語の質問に日本語で答える。	94.2
		対話の内容が聞き取れるか。	57.0 93.4 44.3
		・質問に自分の立場で答える。(カタカナ可)	60.7 41.1 43.5 23.6 40.9
WritingTest 問題内容			
6	5	・空欄に適切な語を選んで補う。	67.9
		語彙力を問う。	87.0 63.9 79.3 63.9
7	5	・短い対話で、抜けている部分に、適切な文、句を選んで補う。	93.6
		短い対話文を読みとる力と慣用表現の知識を問う。	83.0 67.4 65.8 85.7
8	8	・絵を見て、抜けている部分に単語を補い文を完成する。	57.8
		文法力とともに、語彙力を問う。	50.1 51.7 49.1 36.6 34.8 30.2 19.9
9	7	・長い対話文で、抜けている部分に単語を補う。	60.0
		対話文が読みとれるか。	62.1 84.1 57.6 48.8 54.9 26.5
10	4	・手紙文を読み、その日本語の要約文の抜けている部分に語を補う。読みとった内容を日本語で説明する。	70.6
		まとまった話を読みとれるか。	91.5 91.5 70.3 44.8 54.6 33.2
11	1	・単語の並べ替え	54.6
		教科書にでてくる基本的な文を扱っている。生徒に基本文を再生できる力がついているか問う問題。	70.8 68.1
12	1	・友だちを紹介する自由英作文	8点 3.5 3点 8.0
		自己表現力を問う	7点 2.4 2点 11.1 6点 8.0 1点 8.7 5点 4.5 0点 19.4 4点 6.9 無答 28.7

常に英語を使って自己表現の場を与える。毎回の授業で、日常的な Oral Questions を生徒に投げかけたり、生徒どうしあるいは生徒から指導者に質問したりする機会を与え、英語で答えたり、質問したりする能力を高める。教科書を教えるのではなく、教科書で教えるという視点に立って、教科書で扱われていない語彙や表現でも日常生活でよく使うものやコミュニケーションに必要なものは繰り返し提示し、定着を図る。

そして、このような指導が第1学年当初から行われて、はじめて自己表現力や語彙力がつくのである。

さて、「入門期」のとらえ方は人によって様々であるが、前項で第1学年第1学期の指導がその後の生徒の英語学習に対する意識に大きな影響を及ぼしていることが明らかになったことを受けて、この時期が中・高6年間の英語教育のもとであると考え、本研究では第1学年第1学期を入門期と考える。この入門期に日本語とずいぶん違う音やリズム、強勢をもち、1文字1音対応しない英語の語彙に生徒に負担を感じさせないように出合わせ、語彙を増やすこと、そして、それらを使って自己表現する楽しさを味わわせることが、その後の英語学習への関心と意欲とを養うことになると思われる。そこで、次章では、教科書で扱われている学習内容を検討し、入門期に焦点を当て、具体的にどのような指導が必要かを述べることにする。

- (1)『小学校英語実践の手引』文部科学省2001.4
- (2)同掲書 pp.57
- (3)『英語指導方法等改善の推進に関する懇談会 報告』文部科学省 2001.1 p.10
- (4)『学習指導要領(平成10年12月)解説-外国語編-』文部省(現文部科学省)1999.9 p.7
- (5)『英語指導方法等改善の推進に関する懇談会 報告』文部科学省 2001.1 p.4
- (6)齊藤栄二『英語授業レベルアップの基礎』大修館書店 1996 p.56
- (7)杉本義美『中学校英語指導と評価の基本的な考え方』京都市立永松記念教育センター 2001 p.4
- (8)望月昭彦編著『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店 2001 p.51
- (9)手島良「中学入門期-単語を読ませる“綴りと発音”の指導法」、『現代英語教育』大修館書店 1997.7 p.6
- (10)小菅敦子「中学校の現場から」、『現代英語教育』大修館書店 1998.7 p.28

- (11) 澤田利夫 研究代表 「教科に対する児童・生徒の意識(平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書)」、『数学・理科の教師教育プログラムの開発に関する実証的研究』 国立教育研究所 1997,3 pp. 6-7
- (12) 太田満夫 「表現活動を取り入れた学習についての調査研究 中学校英語科の指導のために」、『京都市教育研究所報 276』 京都市教育研究所 1982
- (13) 毎日新聞 1999年7月1日朝刊
- (14) 日本児童英語教育学会(JASTEC)関西支部研究大会資料 2001.6
- (15) 京都市立中学校教育研究会英語部会『平成11年度 京都市中学校英語学習診断テスト 結果報告書 第2回』 2000

第2章 中学校英語入門期の

指導の在り方

第1節 教科書に見る中学校入門期の英語

平成10年版学習指導要領では、前章で述べたように、学年目標・言語活動・言語材料も3学年まとめて提示され、第1学年については「英語を初めて学習する」時期とし、「コミュニケーションに対する積極的な態度の育成を重視する」、「身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせる」、「自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること」を配慮するよう求めているにすぎない。このように第1学年第1学期という入門期については特に触れていないのである。言い換えれば、入門期にはどのような内容をどのように指導するかは、各社の教科書に任されていると言え、また、多くの指導者も教科書で授業を進めていると思われる。そこで、教科書を分析し、どのようなことを学習するのかを見てみることにする。

(1) 第1学年で学習する「語彙」

まず、平成14年度用発行予定の7種類の教科書(16)での第1学期学習予定内容を調べ、次頁の<表8>にまとめた。これによると、ほとんどの教科書が巻頭で、様々な国の挨拶や世界の様々な地域の様子を写真とともに紹介し、世界にはいろいろな生活・文化・言語があることを示している。加えて、生徒の身の回りの単語やクラスルームイングリッシュを文字を添えて紹介しているところもあるが、この段階では、生徒にまだ文字を読むことは要求していない。紹介されている身の回りの単語とは、教室や家の中にある物、食べ物、スポーツが中心であり、教科書によってその数は違

い、10~44種類である。アルファベットの紹介は、7社のうち5社がフォニックス(音と文字との関係)を意識して音と文字とを紹介している。(表の斜線の部分)その5社のうち3社は母音についてのみ2種類の音を紹介しており(例: apron [eɪpɹɒn], apple [æpl]), 1社は、cとuのみ2種類の音を、残りの1社は、巻末の資料でフォニックスの規則に少し触れ、その規則で読める3・4文字単語の読み方を紹介している。確かに、その後の単元ごとの本文で扱われている単語には、生徒にとって、耳慣れない音とフォニックスの基本的な規則に当てはまらないものがたくさん含まれているものの、こうした5社がフォニックスを文字の導入として活用しているのは、それが音と文字とを結びつける上で有効であると考えているからである。

英語は、日本語と違って1文字が1音を表さないため、英語が読めるようになるには、音と綴りとの関係を理解しなければならない。そこで、音と綴りとの関係に規則性を見だし、整理したのがフォニックスである。もちろん、このフォニックスの規則に当てはめれば、すべての英単語が読めるようになるわけではなく、例外もかなりある。しかし、英語の7割~8割はこの規則で読めると言われている。

このフォニックスの規則については、どこまでを例外と考え、「見て覚える単語」とするかによって規則の数が違って来る。日本で紹介されているフォニックスに関する文献は余り多くなく、主なものに松香洋子によるものとA.W.ハイルマンによるものの2種類がある。松香はp.12に示す10の規則をあげている。(17)

一方、ハイルマンはさらに細かく規則を決めている。彼は、「母音のルールで、例外なくどのような場合にも当てはまるというものは1つありません。例外が出てきた場合には sight word として教えてもよいし、例外を説明するために新しい規則を考え出すこともできます。大切なことは子供たちが、適用範囲が非常に限られている規則で悩まされないようにすることです。ですから、教師によって、どのルールをフォニックス指導に含めるかという結論がそれぞれ違ったものになっても当然のことと言えます。」と述べ、子音に関して5つ、母音に関して12の規則とその指導法を示している。(18)

ハイルマンのこれらの規則とその指導法は、米国の児童の初期読み指導用に作成されたものである。彼らは、常に英語を聞き、英語を口にする環境にあり、当然、この指導を受ける段階では基本

<表 8 : 7社の教科書における入門期の学習内容>

	東京書籍 NEW HORIZON	開隆堂 SUNSHINE	三省堂 NEW CROWN	光村図書 COLUMBUS 21	教育出版 ONE WORLD	学校図書 TOTAL ENGLISH	秀文館 TOTALActive.com
巻頭	<ul style="list-style-type: none"> 10言語で挨拶 アメリカ, カナダ, オーストラリアの観光地の写真 	<ul style="list-style-type: none"> 8言語で挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> 65ヶ国の言語 7言語で挨拶 アメリカ・イングランドの写真 	<ul style="list-style-type: none"> 英語圏の国とその時刻 英語圏行事, ニューゼーランド写真 	<ul style="list-style-type: none"> 12言語で挨拶 ニューヨーク, ブータン, パリ風景写真 	<ul style="list-style-type: none"> 10言語で挨拶 世界の子ども写真 	<ul style="list-style-type: none"> アルファベット大小文字cとuのみ2種の音紹介 世界の風景写真
	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶: 絵と文字 クラスルームイングリッシュ: 絵と文字 ジェスチャー: 絵と文字 アルファベット大小文字 3文字英単語 単語: 絵と文字 登場人物紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物紹介: カタカナ 単語: 絵 アルファベット大小文字とその音: 母音のみ アルファベット名前とアルファベット音紹介 クラスルームイングリッシュ 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物紹介: カタカナ 挨拶: 日本語訳付 アルファベット大小文字 単語 フレーズによる応答 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物紹介: アルファベットとカタカナ 単語 アルファベット大小文字 数字 挨拶 クラスルームイングリッシュ 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物紹介: アルファベットのみ クラスルームイングリッシュ アルファベット大小文字 母音のみアルファベット名前とアルファベット音を紹介。 挨拶: 絵とアルファベット クラスルームイングリッシュ 単語: 絵とアルファベット 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物紹介: アルファベットのみ 挨拶紹介 単語(名詞, 動詞) 	
1	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶・自己紹介 be動詞の文 I'm ~. Are you are ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介・挨拶 be動詞の文 I am ~. Are you ~? This is ~. 英文の書き方説明 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 be動詞の文 My name is ~. This is ~. Is this/that ~? 英単語・英文の書き方説明 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 I'm ~. ローマ字 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 I'm ~. 英文の書き方説明 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介(好きなスポーツ)一般動詞の文 I like/love/eat ~. I don't ~. Do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介(好きなスポーツ)一般動詞の文 I like/play. Do you ~?
2	<ul style="list-style-type: none"> This/That is ~. 	<ul style="list-style-type: none"> Is this/that ~? He/She is ~. Is he/she ~? What's this? It's ~. 	<ul style="list-style-type: none"> What is this? I am ~. Are you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> Are you ~? This is ~. 	<ul style="list-style-type: none"> This/That is ~. 英文の書き方説明 Is this/that ~? What's this? 	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の文 不定冠詞a/an 複数形 How many ~? What do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の文 I have/use/walk/ride/eat ~. 疑問詞付疑問文 What do you ~?
3	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 一般動詞の文 I like/play/walk/drive/want/speak ~. Do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 一般動詞の文 My name is ~. I'm from ~. I like/play/have ~. Do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> be動詞文 I am ~. You are ~. Are you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> Is this ~? Who's that? What's this? He/She is ~. Is he/she ~? 	<ul style="list-style-type: none"> He/She is ~. Who is ~? Is he/she ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 三人称単数一般動詞の文 	<ul style="list-style-type: none"> 三人称単数一般動詞の文 We+一般動詞+~. 命令文
4	<ul style="list-style-type: none"> 疑問詞 What's ~? What do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 複数形 一般動詞疑問文 命令文: Don't ~. Let's ~. 	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の文 I have/like/know/play Do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の文 I live/like/love/listen/know/have ~. 一般動詞の疑問文 Do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の文 I have/like/play ~. 一般動詞の疑問文 Do you ~? 	<ul style="list-style-type: none"> be動詞の文 I'm/You're ~. Are you ~? I'm not ~. 	<ul style="list-style-type: none"> be動詞の文 I'm/ You are/ ~ is ~. 疑問詞付一般動詞の疑問文: What do you ~? He/It is ~. 所有格: your, his, my
	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 英文の書き方説明 	<ul style="list-style-type: none"> 疑問詞付一般動詞疑問文 	<ul style="list-style-type: none"> 家族 自己紹介 疑問詞 Where is ~? 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介のスピーチ 曜日 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介のスピーチ 数字 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 一日の生活の簡単な会話 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介

< 松香による 10 の規則 >

6 つの子音 : p, b, t, d, k, g

5 つの短母音 : a, e, i, o, u

一文字子音 : m, n, f, v, s, z, c(cow), c(city), g, l, r, q, x, h, w, j, y

e のついた母音 : a-e, e-e, i-e, o-e, u-e

二文字子音 : ch, sh, wh, th(thin), th(this), ph, ck, ng

礼儀正しい母音 : ai, ay, ee, ea, ey, ie, oa, ow, ui, ue

連続子音 : bl, cl, fl, gl, pl, sl, br, cr, dr, fr, gr, pr, tr, sc, sk, sm, sn, sp, st, spr, str, sw, tw,

2 文字母音 : au, aw, oi, oy, ou, ow, oo(book), oo (spoon), ew

母音と子音 r の組合せ : ar, or, war, ear, ir, ur, wor, er, or, air, are, ear, eer, irc, orc

はじめの子音は発音しない : kn, wr, mb, dge, tch, igh, bb, dd, ff, ll, mm, nn, pp, rr, ss, tt

的な英語によるコミュニケーション能力を備えている。ところが、我が国の中学生は、教室を一步出れば、英語を耳にしたり口にしたりする環境にはないため、英語の音に慣れるというフォニックス指導の前段階に必要な聞く・話す活動が不十分である。そのため、ハイルマンが示す多くの細かな規則を教えられても、それは結局規則の暗記になってしまうと思われる。よって、本研究では松香が提示する10の規則で検討を進めていくことにする。

さて、京都市で平成14年度使用予定教科書の NEW HORIZON 第1学年用(19)で学習する単語の中に、この ~ フォニックスの規則にそって読める単語がどれだけあるかを調べてみた。すると、これらの規則で読める単語が Unit 単元にはいるまでに59, Unit1~4(1学期)の中で70, これら以外のもっと複雑な規則に当てはめて読む単語・見て覚える(規則に当てはまらない)単語は、Unit 単元に入るまでで38, Unit1~4(1学期)の中で、71あった。

このことから、いかに ~ の規則以外で読む単語と見て覚える単語が多いかが分かる。教科書の巻頭カラー頁、「英語であいさつをしよう」「教室で使われる英語」「ジェスチャーを使おう」までは、「話す」「聞く」のみで、「読む」ことは要求されていない。その後の「アルファベットを覚えよう」で、はじめて文字を読むことが始まる。そして、この単元では、巻末に補足説明として、規則 ~ に合う単語がのっている。しかし、その次の「単語をいってみよう」では、英語を学習し始めて間もないにもかかわらず、soccer など ~ の規則では読めない単語や、guitar など「見

て覚える単語」が出てくる。たとえそれらが、生徒にとって身近な単語であったとしても、「単語を読む」導入としては、難しいものが多い。さらに、Unit の単元が始まり、いよいよ生徒は文を読む活動に入る。そうすると一段と ~ の規則では読めない、見て覚える単語が増える。 ~ の10個の規則を当てはめて単語を読む練習をしていない生徒にとっては、10個以外のより複雑な規則に当てはめて読んだり、見て覚えたりする単語は大きな壁である。先述したように、ここで「英語につまずく生徒が増える」のである。読めない単語が1頁にいくつも扱われ、生徒に「結局、英語は暗記科目なのだ」と思わせないためにも、教科書を活用しつつ、入門期に丁寧に音と文字とを結びつけ、単語を読む活動を行うことは、この壁を乗り越える1つの方法だと考える。

(2) 第1学年で学習する「言語機能」

さて、次に入門期に学習される予定の「言語事項」について検討してみる。単元学習にはいると、どの教科書でも英語の基本である be 動詞・一般動詞の肯定文・否定文・疑問文が学習される。また、疑問詞付 be 動詞疑問文や、疑問詞付一般動詞疑問文、三人称単数一般動詞の文、命令文を扱っているものもある。文型については、第5文型中「主語+動詞」「主語+動詞+補語」「主語+動詞+目的語」の3つまでが扱われている。このように中学校の英語科教科書は、文構造の簡易さ、規則性、使用頻度、学習しようとしている言語と母国語間の違いから生じる困難さなどを基準に言語材料の選択や配列が従来からされてきている。そして、その言語材料を使った言語活動が授業で行われている。しかし、平成10年版学習指導要領では、第1章第1節で述べたように、<言語活動の取り扱い>で具体的な場面と言語の働きの例をあげ、「言語の使用場面と働きを意識した言語活動」を求めている。

そこで、どのような言語機能を持つ文が扱われているのかを見てみることにする。

私たちが使っている言語には様々な働きがあり、それらを「言語機能」と呼んでおり、様々な言語機能の分類のし方がある。NEW HORIZON 第1学年用教科書で扱われている「言語機能」を分析するに当たって、van Ek の分類基準が一貫しており、妥当であると考え、彼が「Threshold Level 1990」(20)で提示している言語機能の分類を採用することにした。これによると言語機能は6つの範疇(事実に関する情報を伝える・求め

る、意見・判断・考えなどを表現し、見つけだす、様々なことを行わせる[説得]、社交的活動をする、ディスコースを組み立てる、コミュニケーションの修復)に大きく分けられている。そして、それぞれがまた細かく分けられており、全部で132の言語機能があげられている。NEW HORIZON 第1学年用教科書の本文をこの132の言語機能に分類し、それを京都市教育委員会が作成した中学校教育課程指導計画(英語)(21)の進度に合わせて、各学期ごとにその集計を出した。それが<表9>である。

この表によると、「事実に関する情報を伝える・求める」言語機能の文が最も多く扱われており、

<表9: NEW HORIZON English Course 1 本文の言語機能分類>

言語機能	1学期	2学期	3学期	小計	合計
1. 確認する	14	14	4	32	215/ 339 63.4%
2. 報告する	4	5	2	7	
3. 訂正する	1	2	0	3	
4. 尋ねる	18	32	8	58	
5. 質問に答える	9	29	6	44	
	43.4	79.5	56.9		
1. 陳述に同意を表明する	2	4	1	7	67/ 339 19.8%
5. 人、物あるいは事柄を知っているかどうかを述べる	2	0	0	2	
6. 誰かが人、物あるいは事柄を知っているかどうかを問う	2	0	0	2	
15. あることを行うことができる・できないを表明する	2	0	6	8	
20. あることが許されるかどうか、あるいは黙認できるかどうかを問う	0	0	1	1	
21. 許可を与える	0	0	1	1	
32. 好みを表明する	8	0	0	8	
33. 嫌悪を表明する	1	0	0	1	
34. 好き・嫌いについて問う	1	2	0	3	
35. 満足を表明する	1	0	3	4	
36. 不満を表明する	0	0	1	1	
37. 満足・不満について問う	0	0	1	1	
38. 興味を表現する	2	2	1	5	
41. 驚きを表現する	2	5	1	8	
45. 失望を表明する	2	0	0	2	
49. 感謝を表明する	2	3	1	6	
50. 感謝の表明に対応する	2	1	0	3	
51. 謝罪を述べる	1	1	1	3	
52. 謝罪を受け入れる	1	0	0	1	
	29.2	11.2	25.0		

全体の63.4%を占めている。それに比べると、「意見・判断・考えなどを表現し見つけだす」言語機能の文はそれの3分の1以下の19.8%である。ただ、入門期である第1学期では、扱われている文のうち、43.4%が「事実に関する情報を伝える・求める」言語機能で、29.2%が「意見・判断・考えなどを表現し見つけだす」言語機能であり、後者の文も多く扱われている。しかし、2学期には前者が79.5%、後者が11.2%となり、ほとんどが前者の言語機能を持つ文で占められることになる。また、1年間で「社交的活動をする」言語機能は8.6%、「様々なことを行わせる」言語機能はわずか5.3%しか扱われていない。さらに、「ディスコースを組み立てる」言語機能は2.4%であるが、それは8文のうち7文が手紙の始まりと終わりの定型文である。「コミュニケーションの修復」の言語機能も2文しか出てこず、

言語機能	1学期	2学期	3学期	小計	合計	
1. 行動方針を提案する	3	0	0	3	18/ 339 5.3%	
2. 提案に同意する	3	0	0	3		
3. 他人に何かをするよう、あるいは何かをすることを差し控えるよう警告する	2	0	1	3		
7. 誰かに何かをするように命令する	3	0	0	3		
8. 助けを要請する	2	0	0	2		
10. 誰かに何かをするよう誘う	1	0	0	1		
11. 申し出や招待を受け入れる	0	0	2	2		
14. 誰かに何かをくれるように頼む	1	0	0	1		
	14.1	0	4.1			
1. 注意を引く	1	7	0	8		29/ 339 8.6%
2. 挨拶をする	8	8	3	19		
7. 顧客や不特定多数の一人に話しかける	1	0	0	1		
8. 誰かを別の誰かに紹介する	1	0	0	1		
	10.4	14.2	2.8			
7. 例示する	1	0	0	1	8/ 339 2.4%	
27. 手紙: 始め	1	0	4	5		
28. 手紙: 終わり	0	0	2	2		
	1.9	0	8.3			
3. 文の反復を求める	1	0	0	1	2/ 339 0.6%	
6. 言い換える	0	0	1	1		
	0.9	0	0.9			

全体の0.6%でしかない。このように第1学年の教科書では、「事実に関する情報を伝える・求める」言語機能が多く扱われていることがわかる。

しかし、我々が母国語を習得する際には、「要求、指示、返答、挨拶」の言語機能が最も早く取り扱われ、次に「意思、訴え、注意、怒り」などが取り扱われている。(22)そこで、入門期においても、教科書を活用しつつ生徒の英語でのコミュニケーションに対する関心・意欲を高めるためには、生徒の要求や意思を中心とした「意見・判断・考え等を表現し、見つけ出す」言語機能、指示や訴えを中心とした「様々なことを行わせる」言語機能や「社交的活動をする」言語機能を学習するための言語活動を指導者が工夫して行わなければならないと考える。

そこで、次節では、入門期にどのような目標でどのような語彙を学習し、どのような言語活動を行うのかについて提案することにする。

第2節 入門期の指導の在り方

(1) 入門期の指導と語彙

前項で述べたように、平成10年版学習指導要領では、入門期について特に触れられておらず、言語活動を指導する際の配慮点のみが記されている。そこで、この配慮点と教科の全体目標、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの4領域の言語活動の指導事項から、入門期の目標を次のように考えた。

まず、コミュニケーションを行う際には、相手の目を見て積極的に話を聞いたり、話をしたりすることが求められる。そして、「聞くこと」においては、英語の音・リズム・イントネーションに慣れ、相手の指示、依頼、挨拶や質問に適切に応じることができること、「話すこと」においては、英語の基本的な音声をまねて自分が言いたいことをジェスチャーや実物を使って相手に伝えることが求められる。このように聞くこと・話すことが中心となるが、「読むこと・書くこと」についても次のようなことが求められる。まず、アルファベットを識別し、正しく読み、書けること。そして、アルファベットと音についての簡単な規則を知り、簡単で短い単語を読んだり、書いたりすることである。これを コミュニケーションへの関心・意欲・態度、表現の能力、理解の能力、

言語や文化についての知識・理解の観点別に入門期の学習目標として次頁の<表10>にまとめた。この表は、平成10年版学習指導要領で示されている4領域の各目標から、入門期に特に重視さ

れるべき観点別目標を設定したものを示したものである。その際、この時期においては、特にコミュニケーションへの関心・意欲・態度が重視されるべきだと考えた。

さて、次に、これらの目標にそって、入門期の学習内容を考えてみる。生徒が英語を積極的に聞いてみよう、話してみようとするには、まず、2つの面からの学習が必要だと思われる。1つは、聞いて話せる英語の語彙を増やすこと、もう1つは、コミュニケーションを体験する中で、指示・依頼・質問への適切な応答のし方を身につけることである。言語を聞いたり話したりできるようになるためには、やはり単語が聞きとれ、発音でき、意味が分からねばならない。そこで、はじめて英語を学習する生徒にとって、音や意味、綴りについて少しでも負担が少ない単語として、外来語のもととなっている単語とフォニックスの規則にあった単語を活用することが考えられる。

生徒は中学に入学するまでにすでに日常生活でたくさんの外来語を耳にしており、そのほとんどが英語からきた外来語である。また、外来語を通して、日本語と英語との音やアクセントの違いを生徒に理解させることもできるし、外来語とそのもとの英語が示す意味の違いから、異文化にも触れさせることができる。

そこで、再度 NEW HORIZON 第1学年用教科書ではどれぐらいの外来語のもととなっている単語が扱われているのかを見てみる。教科書では、1年間に本文に出てくる登場人物の名前を除いて、426の単語が扱われている。これらの中から、「現代新国語辞典」(学習研究社、金田一春彦編、1994)と「コンサイス外来語辞典」(三省堂、1979)とに記載されている外来語を基準にして、外来語のもととなっている単語を探してみると、190あった。それを p.16<表11>に示す。この190の英単語のうち第1学期に学習されるものは、80(下線が引いてある単語)あり、中でも、Unitでの学習に入る前の段階では、39(塗りつぶし部分の単語)の単語が扱われている。

中学に入学したばかりの生徒がどのような外来語を知っているかを調査したものがないが、京都市で来年度小学校6年間で使用される予定の全教科の教科書52冊で扱われている外来語が、約800種類あることから考えると、第1学期でもっと多くの外来語のもととなっている単語を扱うことができると思われる。<表11>によると生徒の身の回りのものでテレビも、(ルーズ)ソックスも扱われていない。少しでも生徒の学習の負担が軽く

<表10：入門期の目標>

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。				
	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
聞くこと	英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。 ・強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴を捉え、正しく聞き取ること。 ・自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取ること。 ・質問や依頼などを聞いて適切に応じること。 ・話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。			
	入門期における観点別目標			
話すこと	・顔を上げ、相手の目を見て、相手の話す英語を聞こうとしている。		・英語での指示や挨拶を聞いて、適切に反応することができる。 ・簡単な単語を聞いて意味がわかる。	・英語と日本語の音、リズム、イントネーション、語順の違いがわかる。 ・世界の地域の風習の違いや人々の物の見方や考え方などの違いについて理解する。
	英語で話すことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。 ・強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴になれ、正しく発音すること。 ・自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。 ・聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。 ・つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が続くように話すこと。			
領域の	入門期における観点別目標			
	・相手の目を見て、英語を話そうとしている。 ・積極的に英語を話そうとしている。	・英語での指示や挨拶を聞いて、適切に反応することができる。 ・簡単な単語を正しく発音できる。 ・自分の気持ちを簡単な英語で伝えることができる。		・英語と日本語の音、リズム、イントネーション、語順の違いがわかる。 ・世界の地域の風習の違いや人々の物の見方や考え方などの違いについて理解する。
目標	英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。 ・文字や符号を識別し、正しく読むこと。 ・書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。 ・物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読みとること。 ・伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じること。			
	入門期における観点別目標			
読むこと	・正しい発音でアルファベットと単語を読もうとする。		・簡単な英語を読んで、書き手の言いたいことが理解できる。	・英語と日本語では、読み方に違いがあることが分かる。 ・アルファベットが識別できる。 ・アルファベットと音についての簡単な規則を理解する。 ・アルファベットと簡単な単語を見て正しく発音することができる。
	英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。 ・文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書くこと。 ・聞いたり読んだりしたことについてメモを取ったり、感想や意見などを書いたりすること。 ・自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと。 ・伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書くこと。			
書くこと	入門期における観点別目標			
	・アルファベットや短く簡単な単語を読みやすく、正しく書こうとする。	・学習したことを活かして、簡単に自分のことについて書き表すことができる。		・英語と日本語では、書き方に違いがあることが分かり、英語を書く上での約束事を理解する。 ・アルファベットが識別できる。 ・アルファベットと音についての簡単な規則を理解する。 ・アルファベットや短く簡単な単語を正しく書くことができる。

なるように、生徒が知っている外来語のもととなっている単語をもっと入門期で扱い、英語の音と日本語の音との違い、文化の違いを教えていくことにより、生徒の英語学習への関心と意欲とを高めることができると考える。

そこで、具体的にどのような外来語のもととなっている単語を扱うことができるかについて検討してみることにした。まず、彼らが小学校で触れ

る外来語が扱えると考え、京都市立小学校6年間で来年度から使用される全教科書(23)で扱われている外来語から、入門期に適切であると思われるものを選択した。人名や地名などは使用頻度や使用場面が限られるため、除くことにした。まだ音と綴りとの関係についての学習が深まっていない入門期には、絵や実物を見せて単語を導入することが適切であると考え、この中から絵に描き表し

<表11：外来語カテゴリー別>

天候・時間	身の回りの物		人・動物・体	動き・空間・場所		糸・糸ノツ	飲食物	国・地名	量的・質的・関係的・精神的		
afternoon	bag	flute	entertainer	back	on	badminton	apple	America	best	just	second
birthday	ball	game	family	border	open	baseball	cake	Australia	big	last	seven
date	bed	guitar	friend	class	out	basketball	chicken-	Cairo	blue	long	short
day	bike	name	hair	classroom	over	cricket	burger	Canada	bye	meter	six
evening	boat	notebook	head	clean	park	music	cola	English	eight	minus	small
morning	book	pen	man	club	party	ski	dinner	Japan	eleven	new	ten
night	box	pencil	member	cross	play	skate	fruit	City the	first	nice	third
now	bus	piano	player	cut	run	soccer	hamburger	Blue	five	right	three
rain	camera	science	wrestler	drive	school	softball	juice	Mountains	four	nine	two
snow	cap	shoe	singer	finish	sign	sport	lunch	London	free	no	welcome
star	car	sign		go	station	swimming	milk	Mexico	good	number	white
summer	card	table	動物	hall	town	team	orange	New York	goodbye	old	volunteer
time	chair	tape		help	under	tennis	pie	Sydney	happy	one	yes
vacation	coin	ticket	animal	home	up	volleyball	rice		hard	only	zero
week	comic	tree	cat	house	watch	walking	salad		high	plus	
winter	computer	umbrella	dog	love			soup		hot	round	
	cup	window	kangaroo				shake				
	desk	video	monkey				toast				
	door						yoghurt				

たり、実物で示すことができるもので、生徒にとって身近なものを選ぶことにした。

また、小学校の教科書だけでなく、中学校の英語教科書で扱われている英単語でも、外来語として生徒が知っているものは入門期から導入できると考え、来年度発行される7種類すべての教科書で扱われている外来語のもととなっている単語について調べることにした。7種類の教科書で扱われている英単語は約2,000語で、そのうち740語が「現代新国語辞典」あるいは「コンサイス外来語辞典」で外来語として確認されるものであった。本来なら、中学生対象に外来語の調査を行い、この中から中学校第1学年が知っている外来語を選ぶべきであるが、残念ながらそのような調査を行っていないため、筆者の「中学校第1学年ならば知っているであろう」という基準で選ばざるを得なかった。その際、両辞典では外来語として記載されていないが、「ジョーク(joke)」のように中学生の会話に頻繁に出てきたり、今はやりのレッグウォーマーから「レッグ(leg)」の意味が想像できたりするようなものも扱うことにした。

次に、フォニックスの規則にあった単語について。前節で述べたように、教科書の入門期で扱われる単語には、フォニックスの規則にあわないものが多く、はじめて英語を学習する生徒にとって単語を読むことが大きな壁となる。そこで、音と文字とを結びつけ、フォニックスの簡単な規則にあった単語から「読む」活動を行うことが大切である。では、具体的にどのようなフォニックスの規則にあった単語を扱うかについて検討した。

前節で提示した松香の10の規則にそって筆者自

身も入門期の指導を過去に行ってきた。その中で、はじめて英語を学ぶものにとっては、この10もの規則はかなりの負担であると感じてきた。そこで、10の規則をそのまま導入するのではなく、はじめの3つの規則 ~ は性質が似ているためまとめて1つの規則として導入する。この規則がフォニックスの基礎であるため、この段階で規則 ~ に当てはめて読める3・4文字単語を読む活動を十分に行っておく。そして、次に10の中でも特にその規則にそって読める単語が多い ~ の規則を、入門期に扱う。これをまとめると次のようになる。

<入門期に扱うフォニックスの規則>

1文字1：26文字

eのついた母音：a-e, e-e, i-e, o-e, u-e

2文字子音：ch, sh, wh, th, ph, ck, ng

連続母音：ai, ay, ee, ea, ie, oa, ow, ui, ue

2文字母音：au, aw, oi, oy, ou, ow, oo, ew

この5つの規則に当てはまる単語で、やはり絵や実物で示すことができるもの、生徒にとって身近なものを扱うことにした。

以上に述べた基準により選択された英単語をカテゴリー別に分類して示したものが、p.17, 18の<表12>である。表中の塗りつぶし部分の単語は、来年度使用のNEW HORIZONで使われているものであり、*がついたものは平成14年度京都市立小学校で使用される教科書で扱われている外来語のもととなっている単語、下線を引いたものはフォニックスの規則に当てはめて読むことができる単語である。こうして選択してみると、総数666

<表12：入門期から聞く・発音する活動で導入する単語>

□ : H.14NH第1学年教科書で扱われている英単語

* : H.14国・社・理・算・生・音・保健・図工・家庭科の小学校教科書で扱われている外来語

下線 : P.16 ~ の規則にあてはめて読める単語

動物	乗り物	スポーツ	体・身につける物	建物・自然	天気・暦	動作
<u>animal</u> <u>bird</u> <u>butterfly</u> * <u>cat</u> *cheetah <u>dog</u> <u>dragonfly</u> <u>duck</u> <u>elephant</u> <u>fish</u> <u>fly</u> <u>goat</u> *gorilla *hamster horse * <u>kangaroo</u> *koala *lion monkey *mouse panda * <u>penguin</u> <u>pig</u> <u>sheep</u> <u>snake</u> tiger * <u>pet</u>	*airplane bicycle * <u>bike</u> * <u>boat</u> * <u>bus</u> *car *dumpcar elevator escalator fire engine *gasolin <u>jet</u> *roller coaster (ジェットコースター) *motorbike (オートバイ) patrolcar *pedal <u>plane</u> *rocket * <u>ropeway</u> <u>ship</u> * <u>taxi</u> <u>train</u> * <u>truck</u> *backmirror *platform * <u>seat</u> *seatbelt *speed station	* <u>sport</u> <u>badminton</u> * <u>baseball</u> * <u>basketball</u> * <u>camp</u> *cycling *dodge ball * <u>goal</u> * <u>golf</u> *hiking *icehockey jogging * <u>skate</u> * <u>ski</u> * <u>soccer</u> * <u>softball</u> *surfing swimming table tennis * <u>tennis</u> volleyball * <u>glove</u> * <u>team</u>	*apron <u>belt</u> *boots * <u>cap</u> * <u>coat</u> hair <u>pin</u> <u>hat</u> * <u>helmet</u> <u>jacket</u> *jeans *pants (ズボン) *pajama *ribbon *scarf shoes *skirt shirt *slipper *sneakers <u>socks</u> sweater sweatsuit *T-shirt *underpants *uniform	*apartmenthouse *building <u>city</u> <u>classroom</u> college *convenience store *country *departmentstore * <u>dome</u> elementary school floor * <u>gas</u> gasstation *ground * <u>hall</u> highschool * <u>home</u> <u>hotel</u> horizon <u>hospital</u> *house *jungle juniorhigh school * <u>land</u> *mansion mountain *park policestation *pyramid *restaurant river *road * <u>room</u> * <u>school</u> <u>sea</u> <u>shop</u> *stage *station store *super market *swimmingpool *tower *town *tunnel	<u>cloudy</u> <u>cold</u> * <u>hot</u> <u>rain</u> <u>snow</u> star sunny <u>sun</u> warm weather *season <u>spring</u> summer autumn winter *day <u>week</u> <u>Sunday</u> Monday Tuesday Wednesday Thursday Friday Saturday *air <u>moon</u> <u>month</u> January February March April <u>May</u> June July August September October November December today yesterday tomorrow birthday <u>noon</u> <u>afternoon</u> morning evening night <u>now</u>	*catch * <u>change</u> *challenge *check * <u>clean</u> * <u>clean up</u> <u>close</u> *come here *copy <u>cut</u> *dance * <u>drink</u> <u>drive</u> <u>eat</u> <u>finish</u> <u>fly</u> <u>get</u> <u>getup</u> go have * <u>help</u> *interview <u>jump</u> <u>like</u> listen live look at love open *pass <u>play</u> push <u>read</u> *recycle repeat run <u>sitdown</u> *skip <u>sleep</u> <u>speak</u> <u>stand up</u> *start * <u>step up</u> <u>stop</u> study <u>swim</u> teach *touch *walk watch write
人物	色	数字	体			
*announcer *artist *baby *ballerina *cameraman *captain *counselor *designer *director <u>friend</u> *guest *illustrator <u>man</u> *mother *newscaster <u>player</u> *producer *runner *SantaClaus *speaker	*color <u>blue</u> * <u>green</u> *orange <u>red</u> * <u>silver</u>	eight eighteen eleven fifteen <u>five</u> four fourteen <u>nine</u> nineteen one <u>seven</u> seventeen <u>six</u> sixteen <u>ten</u> thirteen <u>three</u> twelve twenty two <u>zero</u>	cheek elbow eye eyebrow <u>foot</u> hair * <u>hand</u> * <u>head</u> knee <u>leg</u> *nose shoulder toe			
	花					
	*flower *clover *cosmos *crocus *edelweiss *tulip					

飲 食 物		身 の 回 り の 物					
<u>food</u> * <u>fruit</u> * <u>drink</u> breakfast * <u>lunch</u> dinner *apple *asparagus *bacon * <u>banana</u> *barbecue bread *broccoli * <u>butter</u> * <u>cabbage</u> * <u>cake</u> * <u>candy</u> * <u>caramel</u> carrot *cheese cheeseburger *chicken * <u>chocolate</u> * <u>chowing gum</u> *coffee *cookie * <u>cola</u> *cracker *curriedrice *doughnut *dressing *drop *egg *friedchicken <u>grape</u> *gratin * <u>grapefruit</u> *greenpepper * <u>hamburgsteak</u> * <u>hamburger</u> *ice cream * <u>jam</u> *jelly	* <u>juice</u> *ketchup * <u>lemon</u> * <u>lemon pop</u> *lettus *makaroni * <u>margalin</u> *mayonnaise <u>meat</u> * <u>melon</u> * <u>milk</u> noodle <u>oil</u> * <u>omlet</u> *orange <u>peach</u> * <u>pie</u> *pinapple *potato *potatochips *pudding <u>pumpkin</u> * <u>rice</u> ricecracker *salad *salami *sandwich *sausage *sauce *snack *soup *spaghetti *stew sweetpotato *tabacco *tea * <u>toast</u> *tomato *tuna *Vienna sausage *wafer *water white raddish yoghurt	*airconditioner <u>bag</u> *ball *balloon *ballpointpen * <u>basket</u> *bat *beaker * <u>bed</u> *bell * <u>book</u> *bottle * <u>bowl</u> * <u>box</u> * <u>brush</u> *bucket *button *camera <u>can</u> *cap *card *carpet * <u>case</u> *cassetetape *castanets *calendar <u>chair</u> chalk *chello * <u>chime</u> *clarinet * <u>clip</u> *computer *compasses *copy *crayon * <u>cup</u> *curtain *cushion *cutter <u>desk</u>	*diamond *digitalcamera *door *drums eraser * <u>fax</u> *file *film *floor <u>flute</u> *frying pan * <u>game</u> *gas * <u>glass</u> * <u>guitar</u> *handkerchief *handle *hanger *harmonica *harp *heater *hose *ink *iron *jungle gym *keyboard *kitchen *knife *livingroom *lens * <u>lump</u> <u>lunchbox</u> * <u>map</u> *match *matt *medal *memo *menu *merry-go-round *microphone *mirror	*musicbox *net *news not * <u>notebook</u> *number *pamphlet *paper * <u>pen</u> <u>pencil</u> pencilcase * <u>phonecard</u> * <u>piano</u> * <u>pin</u> *pipe *plastic *pliers (ペンチ) *plugreceptacle *present *post * <u>pole</u> *poster *prism *quiz *radio * <u>rail</u> ring *robbot *rocker * <u>room</u> * <u>rope</u> *rubber *rucksack ruler *sawingmachine scissors * <u>scoop</u> * <u>seal</u> *seat *shovel *showlder bag *sketch	*sponge *stove *swimmingpool * <u>shampoo</u> * <u>sheet</u> *shower *signpen *sketchbook *slide * <u>spoon</u> *stand *stapler * <u>steel</u> *stick(ストック) *stone *stamp *stop watch * <u>straw</u> *swich * <u>table</u> *tambourine * <u>tape</u> *tea pot *telephone *television * <u>tent</u> <u>textbook</u> * <u>tile</u> * <u>tire</u> * <u>toilet</u> *toiletpaper TV *towel * <u>tray</u> * <u>tree</u> *triangle *trumpet * <u>video</u> *violin *wall *wordprocessor		
そ の 他							
all answer *animation *art <u>back</u> * <u>bargain</u> * <u>big</u> *birthday bye * <u>camp</u> class * <u>club</u> *chance	*character *Christmas <u>coin</u> *colorful <u>cute</u> * <u>dream</u> family *fasion *festival *fight first * <u>good</u> *goodbye	*goodevening *goodidea *group happy *heart hello * <u>hint</u> * <u>hot</u> *idea *illust * <u>image</u> <u>in</u> *internet	* <u>just</u> <u>last</u> let's *light * <u>line</u> long *love *march *mark *melody *memory *message *minus	* <u>music</u> *musical <u>name</u> *naration *natural * <u>net</u> new <u>nice</u> *no old *OK *orchestra over	* <u>page</u> * <u>parade</u> *part *party * <u>picnic</u> <u>plus</u> * <u>point</u> *present question *report *request *rhysm * <u>rock</u>	* <u>rule</u> * <u>screan</u> *service *sharp * <u>shock</u> *show *shopping * <u>size</u> *slice *song * <u>sound</u> * <u>speed</u> <u>thankyou</u>	* <u>time</u> * <u>tool</u> * <u>top</u> *vitamin *volunteer *wing * <u>wood</u> *world * <u>yes</u> <u>zero</u> * <u>zone</u>

の単語をあげることができた。これだけの単語があれば、豊かな言語活動が展開できると考えられる。

(2) 入門期の言語活動

平成10年版学習指導要領の〈言語活動〉〈言語活動の取り扱い〉を見てみると、3年間を通して、互いの思いや意見を伝え合う言語機能を中心に扱った言語活動を行うことを求めていることがわかる。このような言語活動を行うためには、自分の考えや気持ちなどを聞き手に正しく伝え、話が続

<1999年度版学習指導要領「言語活動」言語活動の取り扱いより抜粋>

- (1) 言語活動
- ア 聞くこと
(中略)
- (ウ) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。
(イ) 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。
- イ 話すこと
(中略)
- (イ) 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。
(ウ) 聞いたたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。
(イ) つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が長くように話すこと。
- (2) 言語活動の取扱い
- ア 3学年間を通した全体的な配慮事項
3学年を通し指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。
(ア) 実際に言語を使用して互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行う(略)
- イ 学習段階を考慮した指導上の配慮事項
生徒の学習段階を考慮して各学年の指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。
(ア) 第1学年における言語活動
英語を初めて学習することに配慮し、コミュニケーションに対する積極的な態度の育成を重視するとともに、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること(中略)
- (ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。
- [言語の使用場面の例]
- a 特有の表現がよく使われる場面
・あいさつ・自己紹介・電話での応答・買い物
・道案内・旅行・食事 など
- b 生徒の身近な暮らしに関わる場面
・家庭での生活・学校での学習や活動・地域の行事など
- [言語の働きの例]
- a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの
・意見を言う・説明する・報告する・発表する
・描写するなど
- b 相手の行動を促したり自分の意思を示したりするもの
・質問する・依頼する・招待する・申し出る
・確認する・約束する・賛成する/反対する
・承諾する/断る など
- c 気持ちを伝えるもの
・礼を言う・苦情を言う・ほめる・謝る など
(下線筆者)

くように工夫して話したり、話し手の質問や依頼などに適切に応じたり、相手の話が理解できない時には聞き返すなどして正しく理解する必要がある。そして、それには、「誰かに何かするよう命令する・誘う、誰かに何かをくれるように頼む」などの「様々なことを行わせる」言語機能、「列挙する、例示する・話を聞いていることを示す」などの「ディスコースを組み立てる」言語機能や「言い換える・言いたいことを繰り返す・語や表現を補充する・理解できないことを合図する・語や句、文の反復を求める・もっとゆっくり話すよう頼む」などの「コミュニケーションの修復」の言語機能の文を学習しなければならない。また、当然「意見・判断・考えなどを表現し見つけ出す」言語機能の文にももっと触れさせる必要があるということになる。

前節でも述べたように、「意見・判断・考えなどを表現し見つけ出す」「様々なことを行わせる」「社交的活動をする」言語機能を扱うことが求められるが、入門期ではなおさらである。このことは、指導者は教科書を題材に、生徒に意見を述べさせたり、生徒が自分自身のことについて語ったりする活動を日頃の授業で取り入れなければならないということである。

たとえば、NEW HORIZON 第1学年用のUnit 3「グリーン先生の初受業」Part 1「自己紹介をしよう」で、グリーン先生が生徒に自己紹介をする場面がある。その中で、彼女が好きなことを述べている。この箇所までで、教科書では、「挨拶する」「報告する」「確認する」「誰かを別の誰かに紹介する」言語機能が扱われている。そこで、入門期のもっと早い段階で、食べ物・スポーツ・色・動物等生徒の好き嫌いがはっきり分かれる単語を導入しながら、「好みを表明する」「嫌悪を表明する」「好き・嫌いについて問う」言語機能を扱った活動を行う。生徒は当然自分自身のことであるため、発話しようとするであろう。また、その後のPart 2と3「インタビューをしよう」では、生徒がグリーン先生の自己紹介を聞いて、質問する場面がある。そこでは、単に「尋ねる」「質問に答える」「報告する」言語機能が扱われているだけであるが、生徒や指導者が互いに自分の生活を紹介しながら、「興味を表現する」「驚きを表現する」言語機能を扱った活動まで発展させることができる。ここでは、相手の発話に対して、そのまま聞いて終わるのではなく、「一言添える」「つぶやく」というコミュニケーションを豊かに続けさせることも学習することができる。

Unit 4「日本大好き」Part 1「これは何？」では、「尋ねる」「質問に答える」「報告する」言語機能が中心に扱われているが、単にある物をさして、何かと尋ねるのではなく、そのものの一部を見せ、それが何かと問いながら、生徒にもっと見せてくれるよう「誰かに何かするよう要求する」「確信の程度を表明する」「確信の程度に関して問う」「陳述に同意を表明する」「不同意を表明する」「同意と不同意について問う」言語機能を扱ったコミュニケーション活動にまで発展させることができる。

このようにして、教科書を題材に指導者と生徒、あるいは生徒どうしによるインタラクションを仕組み、教科書で扱われている以外の言語機能も学習する機会を与えることが大切である。そのためには、指導者には授業全体を all English で進めていくような姿勢が求められる。

- (16)平成14年度用 中学校外国語科用 文部科学省検定済教科書
『NEWHORIZON』東京書籍 701, 『SUNSHINE』開隆堂出版702, 『NEW CROWN』三省堂704, 『COLUMBUS 21』光村図書706, 『ONEWORLD』教育出版705, 『TOTAL ENGLISH』学校図書703, 『TOTALactive. comm』秀文館707
- (17)松香洋子『英語、好きですか』読売新聞社刊 1989
- (18)A. W. ハイルマン著 松香洋子監修 『フォニックス指導の実際』1981
- (19)『NEW HORIZON English Course 1』文部科学省検定済教科書 東京書籍 7012002
- (20)米山朝二・松沢伸二訳『新しい英語教育への指針 中級学習者レベル<指導書> Threshold Level 1990: J. A. van Ek and J. L. M. Trim』大修館書店 1998
- (21)『京都市立中学校教育課程 指導計画 英語』京都市教育委員会 2002
- (22)村井潤一『言語機能の形成と発達』風間書房 1986 p.125
- (23)平成14年度用文部科学省検定済教科書
国語 光村図書 111, 112, 211, 212, 311, 321, 411, 412, 511, 512, 611, 612
社会 東京書籍 301, 302, 501, 502, 601, 602
算数 啓林館 111, 211, 212, 311, 312, 411, 412, 511, 512, 611, 612
理科 大日本図書 303, 403, 404, 503, 504, 603, 604
生活 東京書籍 101, 102
音楽 東京書籍 101, 201, 301, 401, 501, 601
図工 日文図書 106, 305, 306, 505, 506
家庭科 開隆堂出版 502
体育 学研図書 304, 504

第3章 学習プログラムと実証授業

第1節 入門期の学習プログラムと実証授業

(1) 学習プログラム

第1章で述べたことをもとに、教科書を活用しながら、英語の音に慣れ、音と文字とを結びつけ単語を読む活動と「意思・感情を伝え、理解する」「社交的活動をする」といった自分のことを語る言語機能を中心に扱った言語活動とを取り入れた21時間の学習プログラム(P31~34)を作成した。このプログラムは、次に示す4段階で構成されている。

(8時間): 英語の音に慣れ、身の回りのものを英語で話し、アルファベットを正しく聞き分けたり、読んだりすることができる。

(4時間): 英語の音に慣れ、身の回りのものを英語で話し、アルファベットには音があることを理解し、文字と音とを結びつけることができる。

(4時間): 英語の音に慣れ、身の回りのものや自分のことを簡単な英語で表現できる。「子音+母音+子音+e」単語の読み方を理解し、今までに学習した音と文字との結びつきを利用し、「子音+母音+子音+e」単語を読むことができる。

(5時間): 英語の音に慣れ、身の回りのものや自分のことを簡単な英語で表現できる。「2文字子音」の読み方を理解し、今までに学習した音と文字との結びつきの規則を利用して2文字子音を含む単語を読むことができる。

このプログラムは、その時間に導入あるいは復習する単語、学習する言語機能とその言語機能を使った言語活動例、音と文字とを結びつけ単語を読む活動、その時間に学習する内容が扱われている教科書の単元の提示、の5つからなっている。それぞれについて、詳しく説明をする。

まず、単語については、第2章第1節にあげた外来語のもととなっている単語を中心に英単語を増やしていく活動を毎回行う。また、言語機能としては、「好み・嫌悪を表明する」ことから扱うのであるが、生徒にとって好き・嫌いを表現しやすいものは、飲食物、スポーツ、動物であろうと考え、それらの単語から先に導入することにした。次に、「誰かに何かするよう命令する」「質問に答える」言語機能を扱うためには、様々な動詞を知っている必要があると考え、動詞の目的語として導入できる楽器、身の回りのものの単語を扱った。

そして、毎回、それまでに学習した単語の復習と新しい英単語とを学習することにより、生徒に定着させるようにした。生徒に定着が見られた単語は、徐々にはずしていくことにする。

言語機能は、第2章第1節で述べたように「好み・嫌悪を表明する・尋ねる」「感謝を表明する」「感謝の表明に対応する」「満足を表明する」「謝罪する」「謝罪を受け入れる」などの「意見・判断・考えなどを表現し、見つけだす」言語機能と「質問する」「質問に答える」「報告する」などの「事実に関する情報を伝える」言語機能、「誰かに何かするよう命令する」言語機能を扱うことにした。

言語活動例は、上に示した言語機能を取り入れ、「ゲームという服を着たパタンプラクティス」のような練習を中心としたものと、Show & Tellのように練習したことを活かして自己表現を目的にしたものとの2種類を含めている。これの他に毎回、「注意を引く」「謝罪を述べる」「謝罪を受け入れる」「感謝を表明する」「感謝の表明に対応する」「行動方針を提案する」「提案に同意する」言語機能は、設定した言語活動の中で取り上げるのではなく、授業を進める中で自然な場面で扱うようにする。そのためプログラムの「言語機能」の欄にはのせていない。また、教科書の言語材料に近いものをこれらの言語機能の具体的表現としてあげた。

音と文字とを結びつけ単語を読む活動については、学習するフォニックスの規則をあげた。新しいフォニックスの規則がはじめて導入される場合には、その規則をゴシックで示している。

その時間に学習する内容が扱われている教科書の単元の提示については、京都市教育委員会作成の指導計画にそって、第1学期に学習する教科書のUnit 4までを示している。したがって、この指導計画では、Unit 4以降で学習するものも扱っているが、それについては教科書の単元を示していない。また、平成14年度から、英語の授業は週3時間となり、第1学期でおよそ33時間ほどの学習時間となる。この指導計画では、そのうちの教科書教材を使って「読む」活動に入るまでの入門期の初期として、21時間分を提示した。

(2) 実証授業と生徒の様子

研究協力校では、学習プログラムをもとにしながら、中間試験を挟んで16時間の実証授業を行った。ここでは、16時間の授業の流れとともに、特に英語の音に慣れ、生徒が音と文字とを結びつけ

る活動と言語活動での生徒の様子、反応を述べる。
< 第1時 >

挨拶の後、指導者が絵カードや写真を見せながら自己紹介を行った。自己紹介のスピーチの途中から、「好きなスポーツは、サッカーや。」「嫌いな食べ物は、…」などという声が生徒からあった。スピーチの後のWho can tell some about me?という質問にも、何人かの生徒が「好きな食べ物はケーキとチョコレート。」「嫌いな食べ物は、牛肉、チキン。」「サッカーが好きで、中田選手が好き。」と答えていたことから、生徒が指導者の自己紹介スピーチの内容をよく理解していることがわかる。

My name is Kunimi Nishimura.
I'm a home room teacher of 1st year 2nd class.
I like chocolate. I like cakes. I like fish.
But I don't like meat, pork and chicken.
I like sports.
I like to watch sports, especially baseball and soccer.
I like soccer better than baseball.
Why? Because I love Nakata very much.
He is cool. He plays soccer very well.
Italy. This is Italy. Nakata is in Italy now.
Someday I want to go to Rome to see Nakata play soccer. I want to say hello to him.

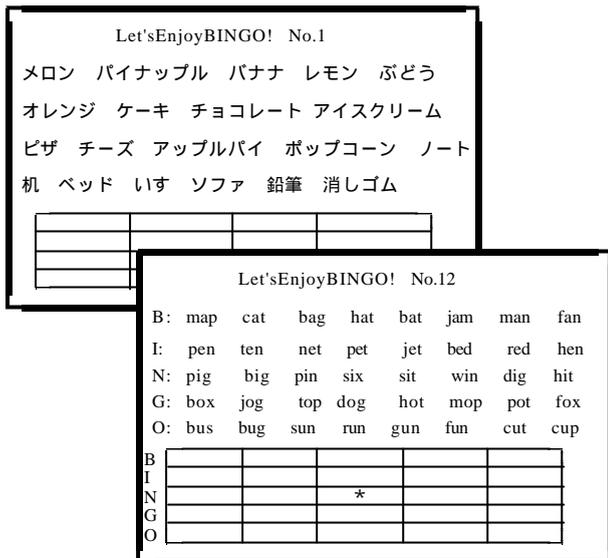


< 指導者が行った自己紹介スピーチの内容 >

< 写真や絵カードを見せながら自己紹介をする指導者 >

自己紹介、英語学習の仕方、授業の受け方、授業にいる準備物についての説明の後、単語ビンゴゲームを行った。まず、指導者は単語ビンゴゲームのやり方を黒板に絵を描いたり、ジェスチャーで示したりしながら、英語で説明した後、外来語として生徒がよく知っている食べ物や身の回りの物の英単語でビンゴゲームを行った。

ビンゴシートにはあらかじめ日本語（英語）で20（～40）個の単語が書かれている。生徒は、その中から16（～25）個の単語を選び、シート上の4（5）列・4（5）行の枠内に、それらを日本語（英語）で書き込む。そして、指導者がシートに書かれた単語から20（30）個を選びそれを英語で発音していく。生徒は、指導者が発音したものと同一単語を自分のビンゴシートに書いていけば、その単語にチェックをする。縦、横あるいは斜め一列にそのチェックがそろえば、ビンゴとなる。指導者が選んだ単語を発音し終わった時点で、ビンゴがいくつあるかを競うゲームである。



< ビンゴシート >

< - 第2時 >

挨拶、宿題の点検後、前回と同じ単語でビンゴゲームを行った。指導者は単に英単語を発音するのではなく、たとえば、「ベッド」という単語なら、「I want to go to bed.」のようにビンゴで扱う単語を文に入れて発音したが、生徒はその単語を聞き取ることができた。また、指導者の発音を聞いて、外来語として知っている音とずいぶん違っていることに気づいている様子が生徒には窺えた。中には指導者のまねをして、「パイナップル」とは発音せず、「pinapple」と英語の音と強勢とを意識して指導者の後にその単語の発音を繰り返している生徒もいた。

ビンゴゲームの後には、絵カードを使って英単語の学習を行った。指導者の「How do you say ノート in English?」という質問に、「ノートブック」という返事が返ってきた。この後、食べ物の単語を絵カードを見せながら紹介した。I like ~.の意味を知らせ、紹介した単語をこの文に当てはめて全員でリピートさせた後、各生徒が I like ~. で好きな食べ物を発表した。生徒が発表すると指導者は「You like ~.」で言い換えたり、「Me, too.」、「I like ~. How about you?」と言ったりして、会話の続け方を提示した。また、なかなか発表できない生徒には、「Don't be shy.」と声をかけ、「Do you like ~?」と具体的に尋ね、生徒が「Yes.」で答えると「I like ~?」と、文にして言うよう促し、発表させた。中には、「I like all.」という生徒もいたり、「嫌いなときはどうなのか。」と質問する生徒もおり、英語を使って自分のことを表現することを楽しんだ。

< - 第3時 >

ビンゴゲームの後、前回紹介した単語を絵カードを見せながら、指導者の後について全員でリピートをした。そして、食べ物の絵カードを指し、「They are foods. We can eat. These are foods. Cat food, dog food. These are foods.」と紹介した後、「What food do you like?」と生徒に尋ねた。指導者は、「I like cake and chocolate.」と何度も質問とともに繰り返し、一人の生徒に「How about you?」と尋ねた。するとその生徒は「Grapes」と答えた。指導者は再度、I like cake and chocolate. You like grapes. と文での言い方を提示し、別の生徒に、「He likes grapes. What food do you like?」と尋ねた。その生徒は、「I like pizza.」と文で答えることができた。その後は、どの生徒も質問に、「I like ~.」の文の形で答えることができた。



< 絵カードで単語を導入する >

< - 第4時 >

生徒の身の回りの外来語を題材にビンゴゲームを行った。次に、新しい単語を絵カードを使って導入した。導入した単語が生徒が日常生活で外来語としてよく知っている単語であったため、指導者が絵カードを見せるだけで、生徒の方からその単語を英語で発音することができた。今までの授業から、生徒は英語と日本語との音や強勢の違いに気づいており、絵カードを見てその単語を発音するときに、自分で強勢をつけて発音していた。

最後にアルファベットカードを見せながら、それぞれのアルファベット名前をラップのリズムで紹介した。ほとんどの生徒がアルファベット名前を発音でき、大文字と小文字とを結びつけることもできた。

< - 第5時 >

ビンゴゲームをした後、新しい単語を絵カードを見せながら導入した。指導者は吹いたり、弾いたりする動作をしながら、「I play the trumpet.」「I play the guitar.」と言って、楽器の絵カードを見せた。次に、飲む動作をしながら、「I drink coke.」「I drink Japanese tea.」と言って、飲み物の絵カードを見せた。そして、最後に「I drink coffee every morning. What do you drink?」と生徒に尋ねた。すると、尋ねられた生徒は、自分を指さしながら「I drink..., I drink juice.」と答えた。列ごとにこ

の質問をし、日本語を介さず I play ~. I drink ~. という文を導入した。

最後に、アルファベットカードでカルタ取りを行った。グループごとにアルファベット大文字カード1セットを配り、指導者がアルファベット名前(たとえば、A なら [ei], B なら [bi:]) を発音し、その文字カードを生徒が取る。そして、一番多くカードを取った者が勝ちとなるゲームである。指導者は、アルファベット名前をそのまま言うのではなく、R なら "Radio, r [a:r]"、S なら "Sun, s [es]" のようにそのアルファベットで始まる単語とアルファベット名前とを発音した。アルファベットを前回に導入したところであるが、どの生徒も積極的にこのゲームに参加していた。

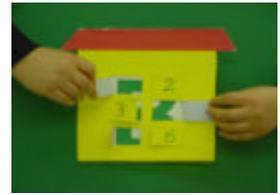
< - 第6時 >

単語ビンゴゲームを行った後、指導者が黒板に今までに学習した単語の絵カードを貼っていき、生徒はその単語を発音していった。指導者は、楽器の絵カードを指しながら、前回導入した I play ~. の復習と、What do you ~? の導入を行った。まず、コーヒーの絵カードを指し、飲む動作をしながら、"I drink coffee every morning. How about you? What do you drink?" で何人かの生徒に質問をし、生徒は I drink ~. で答えた。次に、食べ物の絵カードを指しながら、What do you eat? I eat ~. を導入した。この間、指導者は日本語をいっさい使わなかったが、生徒は既習の I play/drink/eat ~. から What do you play/eat? の意味を理解し、それに答えることができた。その様子を次に示す。

(指導者が指す楽器の絵カードを生徒が発音した後、指導者はバイオリンを弾くジェスチャーをした。)
Ss: You play the violin.
(指導者がトランペットを吹くジェスチャーをする。)
Ss: You play the trumpet.
(指導者が楽器の絵カードを順に指す。)
Ss: You play the piano.
You play the drums.
T: I play the recorder. (リコーダーを吹くジェスチャーをしながら)
What do you play? S1:? (一人の生徒 S1 に向かって)
T: I play the recorder. How about you?
S1: ?
T: Play the piano?
S1: No.
T: Ok. No piano. You don't play the piano.
Try. I don't play the piano.
S1: I don't play the piano.
T: Good.
What do you play? (別の生徒 S2 に向かって) S2?:
T: I play the recorder. He doesn't play the piano.
What do you play?
S2: I play the piano.
T: Good. You play the piano.

次にアルファベット当てを行った。アルファベットカードを中に入れた家の窓を開け、その窓か

ら見える文字の一部を見て、それが何という文字か生徒に当てさせる活動である。ここでは、視覚によるアルファベットの理解だけでなく、「誰かに何かするよう要求する」言語機能の発話が目的である。まず、窓がついている家を見せ、指導者は "Which window do you want me to open?" と尋ねた。当然、このような文を生徒は今までの授業で聞いたことはなかったが、状況からこの質問を理解し、指名された生徒は窓についている数字を "Six." と答えた。ところが、指導者はそう答える生徒に "No." と言って、生徒が言う数字がついた窓を開けようとしな。開けずに、他の生徒に同じ質問をした。質問された生徒は同じように "Two." と答えた。すると指導者は同じように "No." と答えて、窓を開けず、他の生徒に同じ質問を繰り返した。答えているのに、窓を開けない指導者を不思議に思いだした生徒の中から「どうして?」という声があがった。そして、ある生徒が指導者の質問に "Five, please." と答えた。すると指導者は "Very good." と答え、5 の窓を開けた。生徒は、これ以降誰かに何かをもらいたいとき、何かしてほしいと頼むときには、please をつけて発話するようになった。



< - 第7時 >

いつものように単語ビンゴゲームを行った後、アルファベット文字ビンゴゲームも行った。生徒は宿題であらかじめ、ビンゴシートにアルファベット大文字を書いてきている。指導者は "Hat, h [eit]." のように、そのアルファベットで始まる単語とアルファベット名前とを発音した。

次に今まで学習した単語を次のようにして指導者がジェスチャーをつけながら、ヒントを出し生徒に思い出させた。生徒が答えた後、その単語の絵カードを見せ、単語を確認した。

T: I drink with?	S: Glass.
T: Glass and?	S: Cup.
T: Cup on the?	S: Table.
T: I want to sit on the?	S: Chair.
T: No, soft.	S: Sofa.
T: You're sitting on the?	S: Chair.
T: This is not a pencil, but a...?	S: Pen.

(T: 指導者, S: 生徒)

< - 第8時 >

の導入に当たる第8時の段階では、指導者になるべく英語で授業を進め、生徒にとって身近な外来語のもととなった単語を中心に単語を増やすことにより、ずいぶん英語の音に慣れてきたため、

音と文字とを結びつける学習を行った。この学習は、これからの単語の読み活動の導入となる部分であるため、詳細にその指導の様子を述べることにする。

まず、ペンや、筆箱、鞆など生徒の持ち物の色について質問をしたり、指導者の持ち物の色についてクイズを行った。その後、互いに好きな色を尋ねあい、自分と同じ色が好きな人を何人見つけられるかというインタビューゲームを行い、生徒全員に発話の機会を与えた。

箱にペンや消しゴムなどを1つ入れ、箱を振る。そして、その音から中に何が入っているか生徒に尋ね、生徒に音から想像して、ペン、鉛筆、ノートなどと答えさせた。この活動により、生徒は「ものには名前（呼び名）と音とがある」ことを理解した。さて、次に裏にその色を表す単語の頭文字を書いた9色（黒、茶、青、赤、黄、緑、紫、ピンク、橙）の色



カードを黒板に、色を表にして並べた。まず、生徒にどれだけ（表）（裏）の色があるかを覚え、目をつぶ

るよう指示した。生徒が目をつぶっている間に、9枚のうちの1枚を裏向けにし、9枚の順を並べ替えた。生徒に目を開けるよう指示し、裏向けのカードの色を尋ねた。生徒は他の8色から判断して、すぐにその色を答えることができた。他の8色も同様にして、色を尋ねた。次に裏返すカードの枚数を2枚に増やし、1枚のときと同様に色を尋ねることを繰り返した。すると、生徒はカードの裏の文字で判断して色を答えるようになっていった。そこで、裏返すカードを3枚にし、同様にそれらの色を尋ねた。生徒は、文字から判断し、正しく色を答えることができた。

最後に、黒、茶、青の3色のカードを裏返し、それぞれのカードの色を尋ねた。すると3枚とも裏に書かれている文字は、「Bb」であったため、生徒は文字で判断ができず、様々な答えが返ってきた。ここで生徒は、この3つの色を表す単語 black, brown, blue の頭文字が Bb であることに気づいたのである。そして、指導者は「Bb[bi:], b[b], b[b], b[b], b[b], black」とリズムをつけて、アルファベット Bb には、[bi:]というアルファベット名前と[b]というアルファベット音とがあることを紹介した。

この後、b で始まる単語の絵カードの一部を見せ、それらが何かを尋ねた。生徒は、絵の一部と[b]で始まるということをヒントに、それらの絵が何であるかを答えていった。b で始まる単語

として扱ったものの一部をその絵カードとともに下に示す。

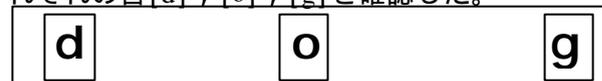


この活動で見た生徒の様子から b には名前と音とがあることを理解したと思われる。そのため、次時に b 以外のアルファベットの名前と音とをアルファベットジングルで紹介することにした。

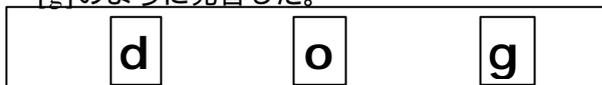
< 第9時 >

単語とアルファベットのピンゴゲームを行った。その際、指導者は単語ピンゴゲームのときは、[s][s][s]・[sAn]のようにその単語のはじめの音と単語、アルファベットピンゴゲームのときは、[s][s][s]・[es]のようにアルファベット音とアルファベット名前とを発音した。

次に、アルファベットと絵カードを見せながら、アルファベット音とアルファベット名前のジングル(A[ei], a[æ]a[æ]a[æ]a[æ], apple[æpl], B[bi:], b[b][b][b][b], book[buk]: 以下アルファベットジングルと呼ぶ。)を歌い、それぞれの文字の音を確認した。そして、アルファベット d, o, g のカードを下に示したように離して黒板に貼り、それぞれの音[d], [ɔ], [g]を確認した。



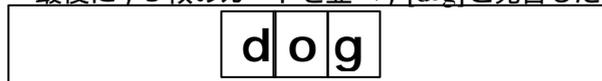
次に、両端の d と g のカードを真ん中の o に少し近づけながら、3つの音を間をおいて[d]・[ɔ]・[g]のように発音した。



そして、d と g のカードをもう少し o に近づけ、3つ音の間を少し詰めて[d][ɔ][g]と発音した。



最後に、3枚のカードを並べ、[dog]と発音した。



同様に、hat, pen, pig, sun の単語も音の足し算で読む活動を行った。それぞれの文字カードを見せ、それぞれの音を確認し、カード3枚を徐々に近づけながら、音の足し算をしていき、最後に3枚を並べ、生徒にそれを発音するよう促すと、生徒はそれぞれの単語を正しく発音することができた。

< - 第10時 >

第9時と同様に2種類のビンゴゲームを行った後、アルファベットジングルを歌い、アルファベット音を確認し、音の足し算で3文字単語を読む復習を行った。そして、Family Words の単語カードで3文字単語を読む練習を行った。その後、ペアで互いに好きな食べ物や飲み物、スポーツ、動物、教科について尋ねあう言語活動を行った。



< 音の足し算で単語の読み指導をする >

< - 第11時 >

3文字単語を単語カードを見ながら全員で読んだ後、ビンゴゲームを行った。アルファベットジングルを歌い、アルファベットの音の確認をし、3文字単語を全員で読んだ後、個人で順に読んだ。そして、単語の発音を聞き、その単語のはじめの文字を書く活動を行った後、ペアで Do you ~? で質問しあうインフォメーションギャップゲームを行った。

map, bag, cat, hat, bat, jam, man, fan
pen, ten, hen, net, pet, jet, bed, red
pig, big, dig, pin, win, six, sit, hit
box, fox, top, mop, jog, dog, hot, pot
bus, bug, cup, sun, run, gun, fun, cut

< 3文字単語 >

< - 第12時 >

アルファベットジングルを歌い、アルファベットの音を確認し、3文字単語を単語カードを見ながら、全員で、個人で読む活動の後、ビンゴゲームを行った。第11時と同様、単語を聞いて、その単語のはじめの文字を答える活動を行った。その後、ペアで互いに朝食に何を飲んだり、食べたりするか、どんなスポーツをするか、ペットを飼っているか尋ねあったりした。

< - 第13時 >

3文字単語の読みができるようになったので、次に「子音+母音+子音+e」単語の読みの導入を次の手順で行った。絵がついた折りたたみ式単語・絵カードを見せながら、まず、cap, tap, hat, mat の単語を見せて、生徒に発音させた。そして、それぞれの単語に e をつけ加え、生徒になんと読むか尋ねた。すると生徒は cape を「カペ」と発音した。指導者は「No, not カペ。」と答えた。次の単語 tape の発音を尋ねると生徒は「タペ」と発音した。そのため指導者は「No, not タペ。」と言いながら、テープの絵を見せた。するとその絵を

見て、生徒は tape が「テープ」を表していると気づき、tape を「テープ」と発音した。指導者は「Not テープ, tape[teip].」と正しい発音を紹介した。次に hate を指し「Not, ハテ。」と言うと生徒から「hate[heit].」という答えが返ってきた。



< 折りたたみ式「子音+母音+子音+e」単語・絵カード >



次に前の単語に戻り、cape をさして、発音を尋ねると、「cape[keip].」という答えが返ってきた。mate の発音を尋ねたが、生徒から「マテ」という答えが返ってきたので、指導者は再度 e をはずして、cap, tap, hat, mat を見せ、[kæp][tæp][hæt][mæt]と発音を聞かせ、e をつけ加え [keip][teip][heit]と単語を発音し、mate を指し示すと、生徒から [meit] という答えが返ってきた。生徒は e が単語の最後につくと発音が変わることに気づいたようであった。そこで、指導者は e がつくとうどうなるかと尋ねると生徒から「音を変えてしまう。」という答えが返ってきたので、「どこの音を？」と質問すると、生徒から「3番目の音」「全部」という答えが返ってきたので、指導者は再度 e がついていない4つの単語を見せ、それぞれの発音を確認し、次に e をつけて、4つの単語の発音を確認した。すると生徒から「2番目の音」という答えがかえってきた。

その後、別の単語の折りたたみ式単語・絵カードで発音を尋ねながら「子音+母音+子音+e」単語の読みの練習を行った。練習で扱った単語は右枠の中のものである。生徒が読み方につまるたび、指導者は母音の名前読みを確認した。

cub-cube
tub-tube
pin-pine
not-note
pet-pete

< - 第14時 >

3文字単語を単語カードを見ながら読み方の練習を全員、個人で行った後、ビンゴゲームを行った。次に、折りたたみ式単語・絵カードを使って、

前回学習した「子音 + 母音 + 子音 + e」単語の読み練習を行った。

そして、楽器と飲み物の絵カードを見せながら、指導者が生徒に Do you play/ drink ~? で質問し、生徒は Yes, I do. No, I don't. で答える活動を行った。その後、グループで互いに同様に質問しあった。

< - 第15時 >

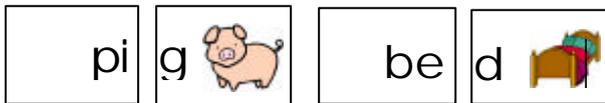
ビンゴで扱う3文字単語の読み練習を行った後、絵カードを見せながら、個人に Do you play ~? で質問をした。その後、ビンゴゲーム(3文字単語)を行ったが、指導者は単語を発音するとき bat [bæt], [b][æ][t] のように、単語を発音した後、

1文字1文字ずつその音を発音した。次に、3文字単語と4文字単語(子音 + 母音 + 子音 + e)をフラッシュカードを見ながら、全員で発音練習を行った。 <扱った4文字単語 >

hate/date/gate/mate/Kate
bake/lake/make/take
bone/cone/tone
cube/tube
like/bike/Mike
pine/mine/nine
hide/ride/wide

< - 第16時 >

3・4文字単語の読み練習を全体、個人で行った後、ビンゴゲームを行った。ビンゴゲームでは、3文字単語を扱っていたが、ほとんどの生徒が指導者が発音する単語をビンゴシートからチェックすることができた。この後、3文字単語で単語パズルを行った。下に示すように、単語の最初の2文字とその単語を表す絵と、最後の文字とがそれぞれ書かれたカードを合わせて、1つの単語を完成するというパズルである。ペアでこのパズルを行ったが、どのペアもスムーズに単語を作ることができた。



< 単語パズル >

第2節 よりよい入門期の学習プログラムを求めて (1) 英語学習に対する意識調査より

第1節で実際の授業の様子を述べてきた。ここでは、文字と音とを結びつける活動を行い、3文字単語を読む練習を行った第2段階12時間目終了後、生徒に英語学習に対する意識調査を行った結果と中間試験の結果からこの学習プログラムの有効性について検討し、入門期の指導の在り方について考察する。

音と文字とを結びつけ、単語を読む活動を始めて英語学習に対してどのように感じるかについて尋ねると、次のような結果となった。

「中学校で英語の授業が始まり、1ヶ月ほど英語の学習をしてきました。英語の学習についてどう思いますか。」

不安だったが今は楽しい	52.6%
前も今も楽しい	28.6%
不安だったし、今もつらい	11.7%
前は楽しみだったが、今はつらい	7.1%

学習が始まる前までは不安だった生徒も含め、英語学習が楽しいと感じている生徒は約80%いるが、今、英語学習が辛いという感想を持っている生徒が残念なことに約20%いるという結果であった。英語学習が辛いという生徒の理由を見ると、「英語で質問されたり、答えたりするのが嫌だ」という答えがほとんどであった。これは、クラス全体で発話練習を行ってから、個人で質問に答えたり、発話したりする活動が少なかったため、人前で英語を口にするにまだ自信がない生徒にとっては、いつ質問されるだろう、うまく答えられるだろうかと不安になったり、緊張したりしたせいではないかと考えられる。十分にその部分を配慮して、指導計画を立てたつもりであったが、指導者が思う以上に丁寧な指導が必要であるということがわかった。

次に、文字の学習について質問した。「アルファベットの音が一人ですべて言えるか」という質問には、左のよ

「今、英語の授業では英単語を読む練習をしています。そのことについて質問します。アルファベット1文字ずつの音が言えますか。」

全部言える	26.6%
ほとんど言える	37.7%
少し言える	34.4%
全く言えない	1.3%

うな結果となっている。全部あるいはほとんどアルファベット音が発音できる生徒は、全体の約64%で、発音しづらい、ある

いは自分一人では発音できない生徒が36%ほどいた。第8時で、音と文字とを結びつける活動を行った後の授業で、最初にアルファベットジングルを歌い、アルファベット名前とアルファベット音とを確認したが、まだまだたりなかったと思われる。クラス全員でリズムにのって歌うことはできるが、いざ一人で言うとなると難しいようである。このアルファベット音が単語を読むときの基本となるため、確実にどの生徒もが発音できるように毎回の授業で、発音練習をすべきであった。

次にはじめて見る3文字単語が読めるかどうかについて質問をした。半数の生徒が予想をつ

「音の足し算をしながら、予想をつけて3文字の英単語が読めますか。」

予想をつけてほしい読める	55.8%
予想をつけて少しは読める	39.0%
全く読めない	5.2%

けてはじめて見る単語を読むことができると答えている。アル

ファベット音をほとんど発音することができるので、答えている生徒が64%だったことから、やはり、単語を読むには、文字と音とを結びつける力が、単語を読めるようになるための基本になっているということがわかった。

最後に、単語を読むことに対する興味に関して、はじめて見る単語を予想して読んでみようとするかどうかについて質問した。60%の生徒が、はじめて見る単語でも学習したことを利用して読んで

「英語の授業以外で短い英単語を見たとき、自分で予想をつけて読んでみようとしていますか、または、読んだことがありますか。」

読んでみようとする または、読んだことがある	60.4%
読もうとしない	39.6%

みようとする」と答えた。これは、前設問の結果

であるアルファベットの音が一人でも言えるかどうかと関係している。一人でもアルファベットの音が言えたなら、授業以外の場面でも自分なりに予想をつけてはじめてみる単語を読んでみようとするであろう。予想をつけて少しは読める、全く読めないという生徒を、一人でもアルファベット音が言えるように指導していたなら、「読もうとしない」という生徒は、減っていたであろう。

また、これは、はじめの設問「英語学習について今、どう感じているか」の結果と関係していると思われる。つまり、英語学習への関心・意欲が高ければ、はじめて見た単語でも学習したことを利用して読んでみようとするであろう。そのことから考えると、入門期であれば、なおさら生徒に授業で関心・意欲を持たせ、はじめての英語に不安を感じさせないようにしなければならないということである。そのためには、学習内容の検討だけでなく、指導する側が、人前で恥ずかしがらずに、間違いを気にせず英語を口にすることができる生徒もいれば、そうでない生徒もいることを心に留め、生徒に安心感を与えるよう配慮しながら英語でのやりとりをする必要がある。

たとえば、「中学校英語指導と評価の基本的な考え方」でも述べられているように「(略)英語教師は授業で英語を使うことが大切だと言われ

る。勿論、その通りであるが、少し気にかかることが最近の授業を見て思うことがある。指導者が流暢な英語を生徒に『聞かせる』のであるが、何か冷たいものを感じる時がある。よく観察するとほとんどの生徒はその指導者の英語に興味を示さないのである。さらにもう少し指導者を観察すると、英語を話すとき、生徒に語りかけていないのである。ただ、指導者が一方的に話して、英語がコミュニケーションの道具になっていないのである。」(24)というようなことがおこなならないようにしなければならない。英語科の指導者は英語を言葉として、互いを理解するためのものであるということを心に留め、生徒との言葉によるインタラクションを行わねばならないと考える。

実証授業では、指導者にほとんど英語で進めるよう依頼したが、その際、人前で発表したり、英語を口にするに自信がない生徒に対する配慮として、全体で口頭練習を行う活動をもっと学習プログラムに入れる必要があったと思われる。ひとりひとりを大切に活動をもっと指導計画に組み込まれていたなら、「英語で質問されたり、答えたりするのがいやだ」という理由で、英語学習がづらいと感じる生徒は減ったと思われる。

(2) 中間試験の結果より

さて、次に中間試験の結果<表13>を通して、学習プログラムにそって学習を行った結果、身の回りの英単語を聞き分け、アルファベットと音とを結びつけることができるようになったかどうかを見てみる。11時間の英語学習が終わって、生徒は、はじめての中間試験を受けた。学習内容が、アルファベットと自分の名前とを英語で書く以外は、すべて音声による活動であったため、試験は100点満点で、そのうち90点分を聞き取りテストで行った。試験問題のうち「書く問題」は、アルファベット大・小文字をそれぞれ線上に書くというものであった。アルファベットを書くという活動は、授業で特別に時間を取って行わず、家庭学習として生徒はピンゴシートにあらかじめ書かれているアルファベットから自分で24文字選んでピンゴシートの枠に書く作業を行うだけであった。その結果、大文字で94.8%、小文字で81.7%の生徒がそれぞれ26文字すべてを書くことができた。目立った間違いは、小文字の m を大文字の M と書き間違えたり、p と q、m と n が逆になっていたりというものであった。これらは、初期によく起こる間違いであり、アルファベットを書く作業を家庭学習だけに終わらせずに、授業で書いてみ

< 表13 : 1 学期中間試験結果 >

問	問題内容 (配点)	正答率 (%)	
1	アルファベット大文字を書く。(1 x 5)	94.8	
	アルファベット小文字を書く。(1 x 5)	81.7	
2	放送される数字を聞き取り数字を書く。(1 x 5)		
	1 4	96.1	
	2 9	93.5	
	3 1 1	95.5	
	4 1 3	61.0	
	5 2 0	88.3	
3	放送される英単語を聴き取り, 8 個の絵の中から適当なものを選ぶ。(1 x 42)		
	果物		
	watermelons	92.8	
	banana	97.4	
	strawberries	98.7	
	lemons	91.5	
	grapes	97.4	
	apple	97.4	
	食べ物・飲み物		
	hamburger	99.4	
	milk	99.4	
	cofee	97.4	
	ice cream	100	
	pizza	99.4	
	cake	99.4	
	スポーツ		
	soccer	100	
	baseball	98.0	
	volleyball	99.4	
	tennis	98.0	
	golf	98.7	
	basketball	98.7	
	学用品		
	ruler	98.7	
	notebook	98.7	
	pen	99.4	
	eraser	98.0	
	computer	99.4	
	scissors	97.4	
	趣味・余暇		
	cards	94.2	
	radio	96.1	
	videogames	99.4	
TV	84.3		
newspaper	97.4		
comicbooks	98.0		
家具・生活用品など			
window	98.7		
table	98.7		
chair	98.7		
sofa	96.7		
bed	98.0		
bike	97.4		
楽器			
guitar	98.0		
piano	100		
recorder	99.4		
trumpet	97.4		
violin	99.4		
drums	99.4		
4	英文を聞いてその状況を表す絵を 8 個の中から選ぶ。(1 x 8)		
	1 Be quiet.	81.1	
	2 Sitdown.	98.0	
	3 Listento me.	82.4	
	4 Open your eyes.	94.5	
	5 Here youare.	90.9	
	6 I'm sorry I'mlate.	99.4	
	7 Standup.	100	
	8 Closeyour eyes.	94.8	
5	英単語を聞いて, 2 つの絵のうちその単語が表す絵を選ぶ。(1 x 5)		
	1 map(pipe)	92.8	
	2 jet(net)	100	
	3 hot(hat)	92.8	
	4 cut(cat)	96.8	
5 pin(pen)	100		
6	英単語を聞いてその単語の綴りを 3 つの中から選ぶ。(2 x 5)		
	1 hat(hot, hit)	92.8	
	2 pen(ten, pet)	96.7	
	3 bug(bag, big)	49.0	
	4 fox(fix, box)	96.1	
5 cup(cut, cap)	60.8		
7	放送される英文に対応する英文を放送される 3 つの英文から選ぶ。(2 x 5)		
	1 Good bye.- Seeyou. (Hello. Nice to meet you, too)	95.4	
	2 Oh, thank you very much.- You're welcome. (I'm sorry. Here youare.)	94.8	
	3 How manybingo didyou get?- Six. (I'm inSeoul. Seven, please.)	58.2	
	4 Well, look at your map. Where are you now?- I'm in Beijing. (Thank you very much. This one, please.)	83.7	
5 What sport do you like?- I like volleyball. (I like cocoa. I like P.E.)	71.9		
8	まとまった文(12 文)を聞いて日本語で書かれた質問に日本語で答える。(2 x 5)		
	1 出身地はどこか。 (イタリア)	10	12.0
	2 好きなスポーツは何か。 (サッカーとバスケットボール)	9	6.0
	3 好きな食べ物は何か。 (ケーキと果物)	8	12.6
	4 朝食に何を飲むか。 (牛乳)	7	19.4
	5 転校してきてどんな気持ちか (うれしい, 幸せ)	6	18.7
		5	10.9
		4	8.4
		3	3.9
		2	4.5
		1	0.6
		0	3.0

る、あるいは、小テストを行い、全員がアルファベットが書ける状態にして試験に臨ませるなどの細かい配慮が必要であったと思われる。

「聞き取り」については、音声による活動が中心であったため、ほとんどの問題でよい結果がでている。ただ、問2の数字を聞き取る問題における「13」と「20」については、授業の中でも指導者から発話される機会が他の数字に比べて少なかっただけに正答率も低い。

また、問4の(1) "Be quiet."、(3) "Listen to me." は授業の中で指導者がよく発話しており、生徒もこのフレーズを聞く機会がたくさんあったと思われるが、正答率が他に比べて低い。逆に選んでいる間違いがほとんどであったことから、どちらも授業で発せられる状況がよく似ていたため、この両者を取り違えたのであろう。生徒に「"Be quiet." は『静かにしなさい。』という意味で、"Listen to me." は『聞きなさい。』という意味です。」と、英語対日本語で指導せず、生徒が状況から指導者が発する文の意味を自分なりに想像して理解しているため、絵から判断するだけでは、このような誤答になるのだと思われる。言語習得から考えて、この指導方法に間違いはないと思われるが、試験に際しては、状況を絵に表すしか方法がないため、試験で提示する絵に配慮が必要であったと思われる。

問5の単語の聞き分けは良くできていると思われる。母音 a[æ], o[ɔ], u[ʌ]の音は日本人にとって非常に聞き取りにくい。しかし、hot-hat を92.8%、cut-cat を96.8%の生徒が聞き分けることができている。単語の発音練習をよく行った成果であると思われる。ただ、これは、単語を聞いて絵を選ぶ問題であり、問6(3)の bug-bag-big の中から [bʌg] を選ぶ問題については正答率が非常に低い。これは、絵ではなく、文字を選んで答える問題であったためと思われる。さらに、単語を見て読む練習が必要である。

問7は、放送される質問や指示に適切に応じることができるかどうかを問う問題である。(3)は "How many bingo did you get?" という質問に対する応答文を、放送される英文から選ぶのであるが、正答率が低かった。生徒は、毎回の授業でビンゴゲームを行うたび、全体で "How many bingo? One? Two? Three? Ten?" という質問に答えていたが、この質問は全体に問われることがほとんどで、個別で答えるということがほとんどなかったため、生徒に印象が薄かったのではないかと考えられる。"Seven, please." という誤答がほとんどで

あったことから、次のように考えられる。授業の中で、新しくプリントが配布されるたび、生徒は、"How many sheets?" と質問され、"Five, please." などと答えていたことから、How many と質問されるとすぐ" (ほしいプリントの枚数), please." と反応してしまったのではないかと考えられる。

(4)は、"Where are you now?" という質問に対する応答ができるかどうかを問っている。ビンゴゲームで完成したビンゴの数をペアと競い、数が多いと、世界の各都市を回る双六シート上で1つ駒を進めることができる。その際、生徒は指導者に "Where are you now?" と質問され、"(I'm) in Beijing." などと都市名を答えていた。にもかかわらず、83.7%の正答率であった。誤答は、Thank you very much. This one, please. の両方ともあり、意味を取り違えているとは言い難い。正答率が低いのは、毎回双六を前に質問されることに慣れてしまい、単に都市名を答えれば良いのだと考え質問そのものに注意を払わなかったためではないかと思われる。

(5)は、"What sport do you like?" という質問に対する応答ができるかどうかを問っている。誤答が、I like cocoa. I like P. E. に分かれていることから、間違えた生徒は質問の sport が聞き取れなかったのではないかと考えられる。生徒は、授業でこの質問に何度も答える機会があったが、それは必ず、スポーツや飲み物等の絵カードが目の前にあって質問されていたため、生徒は What の後の単語にわざわざ注意を向けなくても、どのような範疇について尋ねられているのかがわかってしまう。そのため、改めて試験で絵というヒントがない状況で尋ねられると、質問を正確に聞き取ることができなかったのではないかと考えられる。

このように見ていくと授業の改善とともにテスト問題作成の際、その妥当性も考えなければならぬことがわかる。

(3) 学習プログラムを振り返って

以上の意識調査と中間試験の結果から学習プログラムには次のような改善点が必要だと思われる。まず、英語の授業で、全体生徒の13.6%の生徒が「英語で質問され、英語で答えること」がづらいとしていることから、言語活動を行う前に、全体で十分な発話練習を入れ、人前で話すことが苦手な生徒に自信をつけさせる必要がある。クラス全体で単語や文を声に出して発話させる際に、全体として活気があり、声が出ていけばよしとするのではなく、その中でも自信なげに声を出して

いる生徒、他の生徒につられて単に声を出しているだけの生徒を見極め、適切な援助を加えていかねばならない。たとえば、グループで順に言わせたり、ペアで一人が発話し、もう一人がその発話があっているか、正確に発話できているかを点検する。その間、指導者はグループやペアを回り、援助を必要とする生徒のそばで、ヒントを与えたり、励ましたりして、確実にひとりひとりが目標に到達できるように、活動形態を工夫する必要がある。

次に、誰もが単語を読めるようになるための基礎であるアルファベット音と文字とを結びつけることができるように改善する必要がある。そのためには、毎回の授業の最初にアルファベットジングルを歌うだけでなく、生徒の興味を持続させるためにアルファベットと文字とを結びつけさせるための活動を工夫しなければならない。たとえば、生徒に指導者が発音するアルファベット音を聞いて、アルファベットカードやアルファベット音で始まる単語カードを取らせたり、単語を聞かせ、そのはじめの音から単語の最初の文字を答えさせたりする活動を、毎回取り入れていくことが考えられる。そして、このような活動を学習プログラムの第2段階で、3文字単語を読む活動と平行して繰り返し行うことにより、アルファベット音と文字とを結びつけることができるようになるであろう。

しかし、このプログラムには、上記のようにアルファベット音と文字とを結びつけ、単語を読むことや、アルファベットの定着に向けて個別に働きかけていくという課題があったものの次の点において有効なものだったといえる。

まず、英語学習が始まる前からすでに3割の生徒が英語学習に対して不安や、嫌だと感じていたが、このプログラムにそって学習を進める中で、そう感じる生徒の割合は、約1割と減っている。はじめて聞いたり、口にしたりする単語に配慮し、段階をふんで導入したため、生徒が負担を感じなかったからだと考えられる。また、読む単語についても、音と文字とを結びつけ、フォニックスの簡単な規則にそって読める単語から順を追って導入したことにより、生徒に「単語を読むこと」に対して不安を取り除き、自信を持たせることができたからだと考えられる。このように入門期にこそ、細かな段階をふんだ単語の導入が必要である。

次に、英語学習が始まる前は不安だったが、始めてみて楽しいと感じた生徒が約5割いた。これは、生徒が自分の気持ちや思いを伝える言語機

能をまず学習し、それらを中心とした言語活動を行うことによって、「英語は、自分の思いを伝える道具である、コミュニケーションのための道具である」と感じ、英語でコミュニケーションをすることに関心・意欲を示したものと思われる。

そして、今回のプログラムは、all Englishで導入時から進めたのだが、8割の生徒が英語の授業が楽しいと感じていた。これは、指導者が英語で授業を進めることにより、生徒にとって授業そのものが英語によるコミュニケーションを体験する場となっていたからだと思われる。だからこそ、生徒は、指導者が話す英語を理解したり、自分の思いを何とか英語で伝えたりする喜びや楽しさを味わうことができ、英語でのコミュニケーションに関心を持ち、自らコミュニケーションをしてみようと意欲を持ったからだと考えられる。

以上、この学習プログラムの課題と成果を考察してきた。はじめて英語に触れる入門期に、教科書を活用しながら、段階をふんで単語を導入すること、授業そのものをコミュニケーションの場としながら、自分のことを語る言語機能を中心とした言語活動を行うことにより、生徒に英語を積極的に使おうとする態度を育成することができるのである。そして、そのような態度を育成することが、生徒のその後の学習意欲や理解度をより高めることにつながると考えられる。

(24)杉本義美『中学校英語指導と評価の基本的な考え方』
京都市立永松記念教育センター 2001 p.3

おわりに

「ひとりひとりの生徒を大切にすると」言われ、自分なりにそれを実践してきたつもりであったが、今回入門期の指導の在り方に関して研究する機会を得、ひとりひとりの生徒をよく観察し、確実に達成できるようなステップを組み込んだ指導計画にそって、丁寧な指導をすることの大切さと、あらためて「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」ことの大切さを痛感した。また、同時に、指導者自身が英語でのコミュニケーションを楽しむという姿勢が何よりも、生徒が英語でコミュニケーションをしてみようとする態度を育成するのに大切であると感じた。

そのような思いを持ちながら作成したこの入門期における学習プログラムが4月からのおみなさんの授業に少しでも役に立てば幸いである。

時間	学 習 内 容				NEW HORIZON English Course 1 (ゴシック：単元名)
	単 語	言 語 機 能	言語活動・留意点	文字と音とを結びつける活動	
ねらい (全8時間)	<ul style="list-style-type: none"> 英語の音に慣れ、身の回りのものを英語で話すことができる。 アルファベットを正しく聞き分けたり、読んだりすることができる。 				
1	外来語：飲食物	挨拶をする 別れを告げる 喜び・うれしさ、不快・不愉快について問う 喜び・うれしさ、不快・不愉快を表明する	Hello. Goodmorning/afternoon. Goodbye. Seeyou. Howareyou? (Very)Good/ Fine/So-so/ Notso good/Hungry/Sleepy.	・英語学習の仕方・英語授業の受け方を知る。 ・ペアワーク：互いに挨拶をし、互いに相手の様子を尋ねる。	HE: 英語であいさつをしよう
2	外来語：飲食物	挨拶をする 友人や知人からの挨拶に返事をする 別れを告げる 喜び・うれしさ、不快・不愉快について問う 喜び・うれしさ、不快・不愉快を表明する	Hello. Goodmorning/afternoon. Nictomeetyou. Nictomeetyou,too. Howareyou? (Very)Good/ Fine/So-so/ Notso good/Hungry/Sleepy. I'm~. Mynameis~. I'mfrom~.	・英語でコミュニケーションをするときの約束ごとを知る。 ・ペアワーク：互いに挨拶し、自己紹介をする。 ・自己紹介ゲーム：時間内にできるだけたくさんの人と自己紹介をする。	HE: 英語であいさつをしよう U1-1・2・3 I'm~. I'mfrom~.
3	外来語：身の回りのもの、飲食物	挨拶をする 友人や知人からの挨拶に返事をする 喜び・うれしさ、不快・不愉快について問う 喜び・うれしさ、不快・不愉快を表明する	Hello.Hi.Goodmorning/afternoon. Nictomeetyou. Nictomeetyou,too. Howareyou? I'm (very)good/ fine/ so-so/ not so good/hungry/sleepy. I'm~. Mynameis~. I'mfrom~.	・英語でコミュニケーションをするときの約束ごとを知る。 ・自己紹介：一人ずつみんなの前で自己紹介をする。	HE: 英語であいさつをしよう HE: アルファベットの読み方 U1-1・2・3 I'm~. I'mfrom~.
4	外来語：動物、身の回りのもの、飲食物	喜び・うれしさ、不快・不愉快について問う 喜び・うれしさ、不快・不愉快を表明する 誰かに何かくれるよう頼む 注意を引く 感謝を表明する 感謝の表明に対応する	Howareyou? I'm (very)good/ fine/ so-so/ not so good/hungry/sleepy. ~.please. Hereyouare. Thankyou. You'rewelcome. Notatall.	・ペアワーク：互いに机の上のもので、要求されたものの渡し合いをする。	HE: 英語であいさつをしよう HE: アルファベットの読み方 SP-1 Thankyou.You'rewelcome.
5	外来語：スポーツ、身の回りのもの、動物、飲食物	喜び・うれしさ、不快・不愉快を表明する 誰かに何かくれるよう頼む 注意を引く 感謝を表明する 感謝の表明に対応する 好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う	I'm (very)good/ fine/ so-so/ not so good/hungry/sleepy. ~.please. your,my,~'s Hereyouare. Thankyou. You'rewelcome. Notatall. I (don't) llike~. Doyoulike~? Yes. No.	・指導者が動物や飲食物について尋ねる「好き・嫌い」の質問に答える。	HE: アルファベットの読み方 SP-1 Thankyou.You'rewelcome. U3-1・2・3 S+V+O (名詞)
6	外来語：身の回りのもの、色、スポーツ、動物、飲食物	喜び・うれしさ、不快・不愉快を表明する 誰かに何かくれるよう頼む 注意を引く 感謝を表明する 感謝の表明に対応する 好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う	I'm (very)good/ fine/ so-so/ not so good/hungry/sleepy/tired. Whatedyouwant? ~.please.your,my,~'s Hereyouare. Thankyou. You'rewelcome. Notatall. I (don't) llike~. Doyoulike~? Yes. No.	・指導者が動物や飲食物について尋ねる「好き・嫌い」の質問に答える。 ・飲食物の絵カードを見ながら、自分の好きな食べ物や飲み物を発表する。	HE: アルファベットの読み方 SP-1 Thankyou.You'rewelcome. U3-1・2・3 S+V+O (名詞) U4-3 Whatedyou+V?
7	外来語：身の回りのもの、色、スポーツ、動物、飲食物	誰かに何かするよう要求する 好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う	~.please. your,my,~'s I (don't) llike~. Doyoulike~? Yes. No. What~doyoulike?	・指導者がスポーツ、動物、飲食物ごとに尋ねる「好き・嫌い」の質問に答える。	HE: 教室で使われる英語 HE: アルファベットの読み方 U3-1・2・3 S+V+O (名詞) WP-2 What~?
8	外来語：身につけるもの、身の回りのもの、色、スポーツ、動物、飲食物	誰かに何かするよう要求する 好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う 質問に答える	~.please. your,my,~'s I (don't) llike~. Doyoulike~? Yes. No. What~doyoulike?	・ペアワーク：互いに好きなものを尋ね合う。 ・単語絵カードでカルタ取りをする。	HE: 教室で使われる英語 HE: アルファベットの読み方 U3-1・2・3 S+V+O (名詞) WP-2 What~?

時間	学 習 内 容				NEW HORIZON EnglishCourse1 (ゴシック：単元名)
	単 語	言 語 機 能	言語活動・留意点	文字と音とを 結びつける活動	
ね ら い (全4時間)	<p>・英語の音に慣れ，身の回りのものを英語で話すことができる。</p> <p>・アルファベットには音があることを理解し，文字と音とを結びつけることができる。</p>				
9	外来語：身につけるもの，身の回りのもの，色，スポーツ，動物，飲食物 [b]で始まる単語 アルファベット音で始まる単語	誰かに何かするよう要求する 質問に答える 好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う	~,please. I (don't) like~. Doyoulike~? Yes. No. What~doyoulike?	・指導者が尋ねる色についての質問に答える。 ・インタビューゲーム：好きな色について尋ね合い，自分と同じ色が好きな人を何人見つけるかを競う。	HE：アルファベットを 単語の読み方（巻末綴り込み）：基本的な発音 単語（子音 + 母音 + 子音）
10	外来語：身につけるもの，身の回りのもの，色，スポーツ，動物，飲食物 教科名 アルファベット音で始まる単語	好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う 誰かに何かするよう命令する。	I (don't) like~. Doyoulike~? Yes,Ido. No,Idon't What~doyoulike? Vermuch/Alittle/So-so/Notvery much/ Notatall. Bequiet/Stop/Putyourhandson your heads,please.	・指導者が教科について尋ねる質問に答える。 ・ペアワーク：互いに好きな食べ物や飲み物，スポーツ，動物，教科について尋ね合う。 ・アルファベット音で始まる単語絵カードでカルタ取りをする。	HE：アルファベットを 単語の読み方（巻末綴り込み）：基本的な発音 単語（子音 + 母音 + 子音） U3-1・2・3 S+V+O（名詞）
11	外来語：身につけるもの，身の回りのもの，色，スポーツ，動物，飲食物 教科名 アルファベット音で始まる単語	好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う 質問する 質問に答える 誰かに何かするよう命令する。	I (don't) like~verymuch/alittle/atall. Doyoulike~? Yes,Ido. No,Idon't. What~doyoulike~? Doyouplay/have/drink/eat~? Iplay/have/drink/eat~. Bequiet/Stop/Putyourhandson your heads,please.	・指導者が持ち物，食べ物や飲み物，スポーツに関してする質問に答える。 ・アルファベット音で始まる単語絵カードでカルタ取りをする。	HE：アルファベットを 単語の読み方（巻末綴り込み）：基本的な発音 単語（子音 + 母音 + 子音） U3 - 1 2 3 S+V+O（名詞）
12	外来語：動作，身につけるもの，身の回りのもの，色，スポーツ，動物，飲食物 教科名 アルファベット音で始まる単語	好み・嫌悪を表明する 好き・嫌いを問う 質問する 質問に答える 誰かに何かするよう命令する。	I (don't) like~verymuch/alittle/atall. Doyoulike~? Yes,Ido. No,Idon't What~doyoulike? Doyouplay/have/drink/eat~? Iplay/have/drink/eat~. Bequiet/Stop/Putyourhandson your heads,please.	・指導者が持ち物，食べ物や飲み物，スポーツに関して尋ねる質問に答える。 ・ペアワーク：互いに朝食に何を飲んだり，食べたりするか，どんなスポーツをするか，ペットを飼っているか尋ね合う。 ・アルファベット音で始まる単語絵カードでカルタ取りをする。	単語の読み方（巻末綴り込み）：基本的な発音 単語（子音 + 母音 + 子音） U3 - 1 2 3 S+V+O（名詞）一般動詞

時間	学 習 内 容				NEW HORIZON EnglishCourse1 (ゴシック:単元名)	
	単 語	言 語 機 能	言語活動・留意点	文字と音とを結びつける活動		
ね ら い (全4時間)	<p>・英語の音に慣れ、身の回りの物や自分のことを簡単な英語で表現することができる。</p> <p>・子音 + 母音 + 子音 + e 単語の読み方を理解し、今までに学習した音と文字の結びつきを利用して</p> <p>子音 + 母音 + 子音 + e 単語を読むことができる。</p>					
13	<p>外来語: 乗り物, 体, 動作, 身につけるもの, 身の回りのもの, 色, スポーツ, 動物, 飲食物</p> <p>アルファベット音で始まる単語</p> <p>規則: 子音 + 母音 + 子音 + e</p>	<p>好み・嫌悪を表明する</p> <p>好き・嫌いを問う</p> <p>質問する</p> <p>質問に答える</p>	<p>I (don't) like~alittle/verymuch/atall.</p> <p>Doyoulike~?</p> <p>Yes,Ido. No,Idon't.</p> <p>Whatedyou~?</p> <p>Doyouplay/have/drink/eat~?</p> <p>Iplay/have/drink/eat~.</p>	<p>・Show & Tell: 自分の好きな物2つ, 嫌いな物2つを絵を見せながら紹介する。</p>	<p>・アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。</p> <p>・自分の名前を書く。</p> <p>・規則 ~ に当てはまる単語を読む。</p> <p>・規則: 子音 + 母音 + 子音 + e単語を読む。</p>	<p>単語の読み方(巻末綴り込み): 単語が「子音を表す文字 + e」で終わるとき</p> <p>単語子音 + 母音 + 子音 + e)</p> <p>U3 - 423</p> <p>S+V+O(名詞)一般動詞</p> <p>U4-3</p> <p>What+do+S+V?</p>
14	<p>外来語: 建物, 自然, 乗り物, 体</p> <p>アルファベット音で始まる単語</p>	<p>質問する</p> <p>質問に答える</p> <p>報告する</p> <p>要求・願望を表明する</p> <p>要求・願望について問う</p>	<p>Doyouplay/have/drink/eat/want~?</p> <p>Yes,Ido./No,Idon't</p> <p>What~doyou~?</p> <p>Iplay/have/drink/eat/want~.</p>	<p>・Show&Tell: 自分の好きな物2つ, 嫌いな物2つを絵を見せながら紹介する。</p> <p>・グループワーク: 互いにするスポーツ, 飼っているペット, 朝食に食べたり飲んだりするものなどについて尋ね合う。</p>	<p>・アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。</p> <p>・規則 ~ に当てはまる単語を読む。</p>	<p>単語の読み方(巻末綴り込み): 単語が「子音を表す文字 + e」で終わるとき</p> <p>単語子音 + 母音 + 子音 + e)</p> <p>U3 - 423</p> <p>S+V+O(名詞)一般動詞</p> <p>U4-3</p> <p>What+do+S+V?</p>
15	<p>外来語: 天気, 暦, 建物, 自然, 身につけるもの</p> <p>数字</p> <p>アルファベット音で始まる単語</p>	<p>質問する</p> <p>質問に答える</p> <p>報告する</p> <p>要求・願望を表明する</p> <p>要求・願望について問う</p>	<p>Doyouplay/have/drink/eat/want~?</p> <p>Yes,Ido./No,Idon't</p> <p>What~doyou~?</p> <p>Iplay/have/drink/eat/want~.</p>	<p>・Show&Tell: 自分の好きな物2つ, 嫌いな物2つを絵を見せながら紹介する。</p>	<p>・アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。</p> <p>・規則 ~ に当てはまる単語を読む。</p> <p>・規則 ~ に当てはまる単語パズルをする。</p>	<p>単語の読み方(巻末綴り込み): 単語が「子音を表す文字 + e」で終わるとき</p> <p>単語子音 + 母音 + 子音 + e)</p> <p>U3 - 423</p> <p>S+V+O(名詞)一般動詞</p> <p>U4-3</p> <p>What+do+S+V?</p>
16	<p>外来語: 天気, 暦, 建物, 自然</p> <p>身につけるもの身の回りのもの, 数字</p> <p>アルファベット音で始まる単語</p>	<p>質問する</p> <p>質問に答える</p> <p>報告する</p> <p>要求・願望を表明する</p> <p>要求・願望について問う</p>	<p>Doyouplay/have/drink/eat/want~?</p> <p>Yes,Ido./No,Idon't</p> <p>Iplay/have/drink/eat/want~.</p> <p>Howmany~/Whatedyou~?</p>	<p>・インタビュービンゴゲーム: シートに描かれた絵を見ながら, するスポーツ, 飼っているペット, 持ち物, 朝食に飲んだり食べたりするもの, ほしいものについてクラスの友だちに尋ねる。質問に Yes, I do. と答えた友だちにシートの絵の下にサインをもらう。サインが縦, 斜め, 横一列になれば, BINGO となる。時間内にいくつ BINGO ができるかを競う。</p>	<p>・アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。</p> <p>・規則 ~ に当てはまる単語を読む。</p> <p>・規則 ~ に当てはまる単語パズルをする。</p>	<p>単語の読み方(巻末綴り込み): 単語が「子音を表す文字 + e」で終わるとき</p> <p>単語子音 + 母音 + 子音 + e)</p> <p>U3 - 423</p> <p>S+V+O(名詞)一般動詞</p> <p>U4-3</p> <p>What+do+S+V?</p>

時間	学 習 内 容				NEW HORIZON English Course 1 (ゴシック：単元名)	
	単 語	言 語 機 能	言語活動・留意点	文字と音とを結びつける活動		
ねらい (全5時間)	<ul style="list-style-type: none"> 英語の音に慣れ、身の回りのものや自分のことを簡単な英語で表現することができる。 2文字子音の読み方を理解し、今までに学習した音と文字との結びつきの規則を利用して2文字子音を含む単語を読むことができる。 					
17	外来語：人物，花，その他 身の回りのもの，数字 アルファベット音で始まる単語 規則：2文字子音	質問する 質問に答える 報告する 要求・願望を表明する 要求・願望について問う	Doyouplay/have/drink/eat/want/study~? Yes,Ido./No,Idon't Iplay/have/drink/eat/want/study~. Howmany~/Whatdoyou~?	・数字ピンゴをする。 ・数字に関するクイズを行う。	・アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。 ・規則 ~ に当てはまる単語を読む。	U3-123 S+V+O(名詞)一般動詞 U4-3 What+do+S+V?
18	天気，暦，身の回りのもの アルファベット音で始まる単語	質問する 質問に答える 報告する 要求・願望を表明する 要求・願望について問う 行動方針を提案する 提案に同意する	Doyouplay/have/drink/eat/want/study~? Yes,Ido./No,Idon't. Howmany~/Whatdoyou~? Iplay/have/drink/eat/want/study~. Iam/Youare~. Let's~. Yes,lets. Allright.	・インタビューゲーム：互いの持ちものやその数を尋ね合う。 ・Show & Tell：自分がほしいもの，したいことについて，絵や写真，実物を見せて話をする。	・アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。 ・規則 ~ に当てはまる単語を読む。 ・規則 ~ に当てはまる単語カードでカルタ取りをする。	U1-1, 2-3 S+be 動詞+~. U3-123 S+V+O(名詞)一般動詞 U4-3 What+do+S+V?
19	建物，自然，動物，天気，暦，身の回りのもの アルファベット音で始まる単語	満足・不満を表明する 満足・不満について問う 喜び・うれしさを表現する 不快・不愉快を表明する 質問する 質問に答える 報告する	(That's)good/fine/great. Ilike~. I'mnothappy. Idon'tlike~. Doyoulike~? Isthisgood/allright? Iam/Youare~. Howmany/Whattime/Whattidoyou~? I~. At~.	・Show & Tell：自分がほしいもの，したいことについて，絵や写真，実物を見せて話をする。	アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。 ・規則 ~ に当てはまる単語を読む。 ・規則 ~ に当てはまる単語カードでカルタ取りをする。	U1-1, 2-3 S+be 動詞+~. U4-3 What+do+S+V?
20	乗り物，色，スポーツ，建物，自然，動物，天気，暦，身の回りのもの アルファベット音で始まる単語	満足・不満を表明する 満足・不満について問う 喜び・うれしさを表現する 不快・不愉快を表明する 質問する 質問に答える 報告する 興味を表現する 興味のなさを表現する 驚き・驚いていないことを表現する	(That's)good/fine. Ilike~. I'mnothappy. Idon'tlike~. Doyoulike~? Isthisgood/allright? Iam/Youare~. Howmany/Whattime/Whattidoyou~? I~. At~. Really! Isit? Howinteresting! So,what? Whata surprise! How boring! Well?	・Show & Tell：自分がほしいもの，したいことについて，絵や写真，実物を見せて話をする。	アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。 ・規則 ~ に当てはまる単語を読む。 ・規則 ~ に当てはまる単語パズルをする。	U1-1, 2-3 S+be 動詞+~ U4-3 What+do+S+V?
21	その他，乗り物，色，スポーツ，建物，自然，動物，天気，暦，身の回りのもの アルファベット音で始まる単語	満足・不満を表明する 満足・不満について問う 喜び・うれしさを表現する 不快・不愉快を表明する 喜び・不快，うれしさ・不愉快について問う 質問する 質問に答える 報告する 興味を表現する 興味のなさを表現する	(That's)good/fine. Ilike~. I'mnothappy. Idon'tlike~. Doyoulike~? Isthisgood/allright? Iam/Youare~. Howmany/Whattime/Whattidoyou~? I~.At~. Really! Isit? Howinteresting! So,what? Whatasurprise! Howboring! Well?	・Show & Tell：自分がほしいもの，したいことについて，絵や写真，実物を見せて話をする。	アルファベット大小文字とアルファベット音とを結びつける。 ・規則 ~ に当てはまる単語パズルをする。	U1-1 S+be 動詞+~. U2-2・3 S+be 動詞+~. U4-3 What+do+S+V?